

第三項 差押ハ此命令ヲ船舶管理人ニ送達スルニ因リ債務者ニ送達スルト同一ノ效力ヲ生スヘシ、之ノ管理人ハ船舶所有者ノ代表者ニシテ依リテ船舶ニ關スル事務ヲ處理スルカ故ニ本項ノ結果ヲ生スルモノトス

第七百二十八條 船舶股分ノ競賣代金ノ配當ニ付テハ第六百二十六條以下ノ規定ヲ準用ス

本條ハ競賣代金ノ配當ヲ規定ス
船舶股分ノ競賣代金ノ配當ニ付テハ第六百二十六條以下ノ動産ニ對スル強制執行ノ配當手續ニ從フヘキモノトス

第七百二十九條 外國ノ船舶ヲ差押ヘタルトキ又ハ登記簿ニ登記セサル船舶ヲ差押ヘタル時ノ手續ヲ規定スルモ
外國ノ船舶ヲ差押ヘタルトキ又ハ未ダ登記簿ニ登記シアラサル船舶ヲ差押ヘタルトキハ登記簿ニ記入スヘキ手續ニ關スル規定ヲ適用セサルモノトス、蓋シ登記簿ニ記入ナキモノハ登記ヲ爲スヘキコト能ハサルノミナラス外國ノ船舶ハ日本ノ登記簿ニ記入アラサルヲ以テ從テ之ヲ取扱テ爲スコトヲ得サルカ故ナリ

本條ハ外國ノ船舶ヲ差押ヘタルトキ及ヒ登記セサル船舶ヲ差押ヘタル時ノ手續ヲ規定スルモノナリ
外國ノ船舶ヲ差押ヘタルトキ又ハ未ダ登記簿ニ登記シアラサル船舶ヲ差押ヘタルトキハ登記簿ニ記入スヘキ手續ニ關スル規定ヲ適用セサルモノトス、蓋シ登記簿ニ記入ナキモノハ登記ヲ爲スヘキコト能ハサルノミナラス外國ノ船舶ハ日本ノ登記簿ニ記入アラサルヲ以テ從テ之ヲ取扱テ爲スコトヲ得サルカ故ナリ

第三章 金錢ノ支拂ヲ目的トセサル債權ニ付テノ強制執行

本章ハ金錢ヲ支拂ハサル場合ノ強制執行ヲ規定セス

金錢ノ支拂ヲ目的トセサル債權即チ物件上ニ權利ヲ有シ之カ引渡ヲ求ムル場合ニ於ケル強制執行方法ナリトス

第七百三十條 債務者カ特定ノ動産又ハ代替物ノ一定ノ數量ヲ引渡ス可キトキハ執達吏ハ之ヲ債務者ヨリ取上ケテ債權者ニ引渡ス可シ

本條ハ引渡スヘキ場合ニ於ケル執行方法ヲ規定ス
債務者カ債權者ニ對シテ特定ノ動産ヲ引渡シ(一)代替物ノ一定ノ數量ヲ引渡ス(二)ヘキ場合ニ在テハ執達吏ハ債務者ヨリ之ヲ取上ケ債權者ニ引渡スヘキモノトス、例ヘハ甲ヨリ乙ニ自己所有ノ應擧ノ畫軸ヲ引渡スコトヲ約シタルトキノ如キ又ハ米百石ヲ賣渡シタルトキノ如キハ執達吏ハ甲ヨリ畫軸又ハ米百石ヲ取上ケ之ヲ乙ニ引渡スニアリ

人或ハ曰ハソ養女取戻ノ如キ又ハ引取ル等ノ場合ニ於テハ如何爲スヘキヤト曰ク本條ニハ人休ノコトハ規定ナシ之レ欠典ナラン若シ問題ノ如キ人体ノ引渡ノ判決アリシナラハ本條ニ準シテ執行處分ヲ爲スハ決シテ差支ナカルヘシトス

執達吏ハ競賣執行ノ爲メニスルト假處分ノ爲メニスルトヲ問ハス本條ノ行爲ヲナシタルトキハ手数料ヲ受クヘシ(明治二十五年九月法曹會決議)債權者カ債務者所有ノ米穀ニ對シ假執行ヲ爲サントシタルニ該米穀ハ既ニ他ノ債權者ニ差押ヘラレタル場合ハ最初ニ於テ既ニ特定

○第六編強制執行○第三章金錢ノ支拂ヲ目的トセサル債權ニ付テノ強制執行

物トシテ差押アレハ其配當ニ加入スルコトヲ得サルモノトス(同上)

第七百三十一條 債務者カ不動産又ハ人ノ住居スル船舶ヲ引渡シ又ハ明渡ス可キトキハ執達吏ハ債務者ノ占有ヲ解キ債權者ニ占有ヲ得セシム可シ

此強制執行ハ債權者又ハ其代理人カ受取ノ爲メ出頭シタルトキニ限リ之ヲ爲スコトヲ得

強制執行ノ目的物ニ非サル動産ハ執達吏之ヲ取除キテ債務者ニ引渡ス可シ

若シ債務者不在ナルトキハ其代理人又ハ債務者ノ成長シタル家族若クハ雇人ニ之ヲ引渡ス可シ

債務者及ヒ前項ニ掲ケタル者不在ナルトキハ執達吏ハ右ノ動産ヲ債務者ノ費用ニテ保管ニ付ス可シ

債務者カ其動産ノ受取ヲ怠ルトキハ執達吏ハ執行裁判所ノ許ヘテ得テ差押物ノ競賣ニ關スル規定ニ從ヒテ之ヲ賣却シ其費用ヲ控除シタル後其代金ヲ供託ス可シ

本條ハ不動産又ハ船舶ノ引渡シ明渡シニ付テノ執行方法ヲ規定ス

第一項 債務者ニ於テ不動産又ハ人ノ住居スル船舶ヲ引渡シ又ハ明ケ渡スヘキ判決確定シタルトキハ執達吏ニ於テハ債務者ノ占有ヲ解キ債權者ニ其占有ヲ得セシムルニアリ即チ甲ヲ立退カシメテ乙タル權利者ニ引渡シ以テ住居セシメ又ハ自由ニ處分セシムル様ニ爲サシムルコトアリ

第二項 第一項ノ債務者ノ占有ヲ解キ債權者ニ占有ヲ得セシムルハ債權者ニ於テ受取ルモノナカサルヘカラス故ニ債權者又ハ其代理人カ出頭シタルトキニ限り之ヲ爲スコトヲ得ヘキモノトス然ラサレハ占有セシムルコト能ハサレハナリ

第三項 不動産又ハ船舶内ニアル強制執行ノ目的物ニアラサル動産アルトキハ之ヲ債務者ニ引渡スヘキハ勿論ナリ、若シ債務者カ不在ナルトキハ其代理人又ハ債務者ノ成長シタル家族又ハ雇人ニ之ヲ引渡スヘキモノトス

第四項 若シ債務者本人ハ勿論其家族雇人ニ至ルマテ不在ナルトキハ執達吏ハ右ノ動産ヲ保管スヘシ、尤トモ爲メニ費用ヲ要スルトキハ債務者ノ負担タルコト論ヲ俟タサルモノトス

第五項 債務者ハ右ノ保管物ヲ受取ラサルトキハ執達吏ハ裁判所ノ許可ヲ得テ競賣ニ付シ其代金ノ内ヨリ費用ヲ差引キタル後其代金ヲ供託シ置クヘシ
僧侶ニ寺院立退ヲ命スル假處分ノ如キハ家屋明渡ノ命令ト一般本條及ヒ執達吏職務規則第一百十一條第三號以下ノ規定ヲ準用シ執達吏ニ於テ其履行ヲ實施スヘキモノトス(明治二十九年七月大審院判決)

土地ヲ離レサル米麥ノ執行ハ判決ヲ以テ其目的ヲ限定シ若シ土地ノミヲ目的ト定メタルトキハ本條第二項以下ニ依ルヘク又債務者ノ家族ハ第七百三十三條ニ依リ之ヲ取扱ハシムヘキモノトス、本條第五項ノ場合ニ於ケル手数料ハ執達吏手数料規則第九條ニ依ルヘキモ第七百三十三條ノ場合ハ執達吏ノ手数料ヲ生セサルモノトス（法曹會決議）

第七百三十二條 引渡ス可キ物カ第三者ノ手中ニ存スルトキハ債務者ノ引渡ノ請求ハ申立ニ因リ金錢債權ノ差押ニ關スル規定ニ從ヒテ之ヲ債權者ニ轉付ス可シ

本條ハ引渡物カ第三者ノ手中ニアルトキノ處分ヲ規定ス

引渡スヘキ物カ第三者ノ手中ニアルトキハ第七百三十條ニ依ル債務者ノ引渡ノ請求ハ申立ニ因リ債權者ニ轉付スヘキモノトス、之レ金錢債權ノ差押ニ關スル規定ニ從ヒテ之ヲ爲スヘキナリ

第七百三十三條 民法第四百十四條第二項及ヒ第三項ノ場合ニ於テハ第一審ノ受訴裁判所ハ申立ニ因リ民法ノ規定ニ從ヒテ決定ヲ爲ス（明治三十一年法律第十一號ヲ以テ本條中改正）
債權者ハ同時ニ其行爲ヲ爲スニ因リ生ス可キ費用ヲ豫メ債務者ニ支拂ヲ爲サシムル決定ノ宣言アラントキ申立ツルコトヲ得但其行爲

ヲ爲スニ因リ此ヨリ多額ノ費用ヲ生スルトキ後日其請求ヲ爲ス權利ヲ妨ケス

本條ハ代換的行爲ニ付テノ規定ヲ示ス

第一項 債務者カ爲スヘキ行爲ヲ爲ササルトキ例ヘハ建築スヘク、他人ノ負債ヲ償却スヘク工事ヲ爲サ、ル、中止スル等ノ行爲ニ付キ債務者ニ於テ契約ノ如ク爲サ、ルトキ第三者ヲシテ爲サシメ得ヘキモノナルトキハ第一審ノ受訴裁判所ハ申立ニ因リ民法ノ規定ニ從ヒ決定ヲ爲ス、而シテ此民法ノ規定トハ即チ左ノ如シ

民法第四百十四條債務者カ注意ニ債務ノ履行ヲ爲ササルトキハ債權者ハ其強制履行ヲ裁判所ニ請求スルコトヲ得但債務ノ性質カ之ヲ許ササルトキハ此限ニアラス

債務ノ性質カ強制履行ヲ爲ササル場合ニ於テ其債務カ作爲テ目的トスルトキハ債權者ハ債務者ノ費用ヲ以テ第三者ニ之ヲ爲サシムルコトヲ裁判所ニ請求スルコトヲ得但法律行爲ヲ目的トスル債務ニ付テハ裁判ヲ以テ債務者ノ意思表示ニ代フルコトヲ得

不作爲ヲ目的トスル債務ニ付テハ債務者ノ費用ヲ以テ其爲シタルモノヲ除却シ且將來ノ爲メ適當ノ處分ヲ爲スコトヲ請求スルコトヲ得

前三項ノ規定ハ損害賠償ノ請求ヲ妨ケス

第二項 債權者ニ於テハ同時ニ其行爲ヲ爲スニ因リ生スルコトアルヘキ費用ヲ豫メ債務者ニ支拂ヲ爲サシムル決定ノ宣言アラントキ申立ツルコトヲ得ヘシ尤トモ其請求ヲ爲スニ因リ

○第六編強制執行○第三章金錢ノ支拂ヲ目的トセサル債權ニ付テノ強制執行

此ヨリ多額ノ費用ヲ生スルトキ後日其請求ヲ爲ス權利ヲ妨ケサルニアリ、費用ハ別ニ訴ヲ要セズ直チニ其費用ニ付テモ執行シ得ヘキモノトス

第七百三十四條

債務ノ性質カ強制履行ヲ許ス場合ニ於テ第一審ノ受訴裁判所ハ申立ニ因リ決定ヲ以テ相當ノ期間ヲ定メ債務者カ其期間内ニ履行ヲ爲ササルトキハ其遅延ノ期間ニ應シ一定ノ賠償ヲ爲スヘキコト又ハ直チニ損害ノ賠償ヲ爲スヘキコトヲ命スルコトヲ要ス(明治三十四年法律第十一號ヲ以テ本條改正)

本條ハ不代換的行爲ヲ規定ス

債務者カ其自己ノ意思ノミニ因リ爲シ得ヘキ行爲例ヘハ証書ヲ作ルヘシ、精算ヲ爲スヘシ、委任ヲ爲スヘク等ノ如キ場合ニ於テ第三者カ之ヲ爲シ得ヘカラサルモノナルトキハ第一審ノ受訴裁判所ハ申立ニ因リ民法ノ規定ニ從ヒテ決定スヘシ、而シテ民法トハ前條ニ揭示シタルモノニアレハ注意スヘシ

第七百三十五條

前二條ノ決定ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得但決定前債務者ヲ審訊ス可シ

本條ハ決定方法ヲ定ム

前二條ノ決定ヲ爲スコハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得尤トモ決定前ニ於テ債務者ヲ審訊スルモノナリ

第七百三十六條

債務者カ權利關係ノ成立ヲ認諾ス可キコト又ハ其他ノ意思ノ陳述ヲ爲スコキコトノ判決ヲ受ケタルトキハ其判決ノ確定ヲ以テ認諾又ハ意思ノ陳述ヲ爲シタルモノト看做ス反對給付ノ有リタル後認諾又ハ意思ノ陳述ヲ爲スコキ場合ニ於テハ第五百十八條及ヒ第五百二十條ノ規定ニ從ヒ執行力アル正本ヲ付與シタルトキ其效力ヲ生ス

本條ハ判決ヲ以テ認諾又ハ意思ノ陳述ヲ爲シタルモノト看做スヘキ場合ヲ示ス

債務者カ權利關係ノ成立ヲ認諾スヘキコト(一)其他ノ意思陳述例ヘハ權利ヲ讓渡シ登記ヲ爲ス旨ノ陳述ノ如キハ之ヲ認諾スヘシ又ハ陳述ヲ爲スヘシトノ判決ヲ受ケタルトキハ其判決ノ確定ヲ以テ認諾シ又ハ意思ノ陳述ヲ爲シタルモノト看做スモノトス、蓋シ人力ヲ以テ爲シ得ヘカラサルカ故ナレハナリ

反對給付ノ有リタル後認諾又ハ意思ノ陳述ヲ爲スヘキ場合例ヘハ金若干圓ヲ渡シテ認諾スヘク又ハ金若干圓ヲ受取リテ登記ヲ爲スヘシト云フカ如ク一方ヨリモ履行ヲ要スル場合ナルトキハ第五百十八條及ヒ第五百二十條ノ規定ニ從ヒ証明書ヲ以テ履行シタルコトヲ証シ裁判長ノ命令ヲ以テ執行力アル正本ヲ付與スルヲ以テ其時ヲ以テ効力ヲ生シタルモノトス、之レ反對給付ヲ爲シタル後ニアラザレハ爲スコト能ハサルカ故ナレハ証明ヲ得テ一方ニ對シ義務ヲ履行シタルコトヲ確ムレハナリ

○第六編強制執行○第三章金錢ノ支拂ヲ目的トセサル債權ニ付テノ強制執行

第四章 假差押及ヒ假處分

本章ハ假差押及ヒ假處分ノコトヲ規定ス

假差押及ヒ假處分ハ全ク確定シタル債權ノ爲メニ之ヲ爲スコアラズ執行保全ノ爲メニ假リニ之ヲ爲スヘキモノナリ、故ニ常ニ判決ヲ受ケサル以前ニ於テ此處分ヲ求ムルモノトス、即チ判決ヲ受ケテ後日執行ヲ爲ス場合ニ於テ之カ損失ヲ受ケサルカ爲メニ豫メ之ヲ防ク爲メニ爲スモノトス

第七百三十七條 假差押ハ金錢ノ債權又ハ金錢ノ債權ニ換フルコトヲ得ヘキ請求ニ付キ動産又ハ不動産ニ對スル強制執行ヲ保全スル爲メ之ヲ爲スコトヲ得

假差押ハ未タ期限ニ至ラサル請求ニ付テ爲スコトヲ得

本條ハ假差押ヲ爲スヘキ場合ヲ示ス

假差押ヲ爲スコハ左ノ條件ヲ具備セサルヘカラス

第一 金錢ノ債權又ハ金錢ノ債權ニ換フルコトヲ得ヘキ請求ナルコト

第二 動産又ハ不動産ニ對スル強制執行ヲ保全スル爲メナルコト

是ナリ、故ニ後日請求スルニ付キ安全ナルカ爲メニ豫メ債權者ノ財産ヲ差押ヘ以テ自己ノ權利ヲ安全ニ保ツテ云フ、而シテ右ノ如ク保全ノ爲メナルヲ以テ未タ期限ノ至ラサル請求ニ付テモ亦之ヲ爲スコトヲ得ヘキモノトス

乙者ノ敗訴ニ歸シタルハ其請求ノ根據ナキカ故ニアラスシテ起訴ノ方法其宜キヲ得サリシカ爲メナレハ對手人甲者ハ之カ爲メ乙者ニ對スル債務ヲ免レタルモノト云フヲ得ス然ラハ假令乙ハ一旦敗訴シタルニモセヨ本訴ニ於テ勝訴ノ判決ヲ受クルニ至リタル上ハ前訴ノ際債權保全ノ爲メ爲シタル假差押ハ決シテ不法ナリト云フヲ得サルニ原裁判所カ其債權ヲ保全スルノ意思ヲ以テ假差押ヲ爲シタルト假令訴訟ノ目的ヲ達セサルモ違法ニアラスト説明シタルハ相當ナリ而シテ原判決ノ探証上ニ多少ノ不都合アルモ之カ爲メ損失ヲ受ケタリト云フヲ得サル筋合ナルトキハ爲メニ其判決ヲ破毀スルニ足ラス(明治二十七年十月大審院判決) 甲ハ乙ニ對スル債權ノ執行保全ノ爲メニ未タ亡父名義ニシテ乙ニ名義換登記ノ濟マサル地所ト雖モ假差押ヲ爲スコトヲ得(同年十一月同上) 質期間中其質物ニ對シ假處分ノ命令ヲ受ケタルトキハ其質置主ニ於テ其債務ヲ辨濟スルトキト雖モ仍ホ其質受ハ法律ニ基ク命令ノ力ニ依リテ欠意期間ニ於テ之ヲ爲スコト能ハス質權者モ亦其期間ノ滿了ニ依テ質物ノ所有權ヲ取得スルコト能ハス(同二十八年五月同上) 假差押ハ係爭物ノ變更ヲ豫防セントスルカ如キトキニ爲スヘキモノニ非ス(同三十年十一月同上)

第七百三十八條 假差押ハ之ヲ爲ササレハ判決ノ執行ヲ爲スコト能ハス又ハ判決ノ執行ヲ爲スニ著シキ困難ヲ生スル恐アルトキ殊ニ外國ニ於テ判決ノ執行ヲ爲スニ至ル可キトキハ之ヲ爲スコトヲ得
本條ハ尙ホ假差押ヲ爲スヘキ場合ヲ規定ス

假差押ハ尙ホ左ノ場合ニ於テモ爲スコトヲ得ヘシ

第一 之ヲ爲ササレハ判決ノ執行ヲ爲スコト能ハサルトキ

第二 判決ノ執行ヲ爲スニ著シキ困難ヲ生ズル恐レアルトキ

是ナリ、而シテ第一ノ如キハ假令ハ動産物ノ取戻ヲ爲ストキニ假差押ヲ爲シ置カサレハ其物

件ヲ他ヘ轉讓セシトキノ如シ尤トモ單ニ債務者ノ手元不如意ナリト云フカ如キハ本號ニ當ラ

ス、第二ノ如キハ外國ニ於テハ判決ノ執行ヲ爲スニ至ルトキノ類ナリ

債務者ノ死亡後其相續人カ不動産ニ付キ未タ相續ノ登記ヲ經サルト雖モ債權者ハ之カ假差押

ヲ爲スコトヲ得ヘシ (明治二十八年七月法曹會決議)

第七百三十九條 假差押ノ命令ハ假ニ差押フ可キ物ノ所在地ヲ管轄ス

ル區裁判所又ハ本案ノ管轄裁判所之ヲ管轄ス

本條ハ假差押ノ裁判籍ヲ規定ス

假差押ノ命令ハ假ニ差押フヘキ物ノ所在地ヲ管轄スル區裁判所又ハ本案ノ管轄裁判所之ヲ管

轄スルモノトス之レ假差押處分ヲ爲スコト付キ便宜ナルヲ以テナリ

地方裁判所ノ管轄ニ屬スル事件ニ付本案控訴前ト雖モ其裁判所ヘ假差押假處分ノ申請ヲ爲ス

コトヲ得ヘシ (明治二十七年十二月法曹會決議) 物ノ所在地ノ中ニハ有形無形ヲ包含ス故ニ

債權差押ハ第三債務者ノ住所ノ地ヲ管轄スル區裁判所又ハ本案ノ管轄裁判所トス (同二十六

年七月同上)

第七百四十條 假差押ノ申請ニハ左ノ諸件ヲ掲ク可シ

第一 請求ノ表示若シ其請求カ一定ノ金額ニ係ラサルトキ其價

額

第二 假差押ノ理由タル事實ノ表示

請求及ヒ假差押ノ理由ハ之ヲ説明スヘシ

申請ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

本條ハ假差押ノ申請ニ記載スヘキ事項ヲ規定ス

第一項 假差押ノ申請ハ其理由タル事理ヲ表示スルハ當然ニシテ請求ヲモ表示セサルヘカラ

ス之レ其裁判管轄ヲ知ルノミナラス假差押ヲ爲ス程度ヲ知ルカ爲メナリ

第二項 第一項ノ請求及ヒ假差押ノ理由ハ之ヲ説明ス可シ其説明方法ハ第二百二十條ノ如シ

第三項 申請ハ口頭ヲ以テ爲スコトヲ得ヘシ其場合ニ書記之カ調書ヲ作ルモノトス

民事裁判所ニ申請シテ假差押ノ命令ヲ得タル後申請者ノ選擇ニ依リ本案ノ訴ヲ控訴トシテ刑

事裁判所ニ提起スルモ既ニ得タル假差押ノ命令ノ無効ヲ惹起スルカ如キ關係ヲ生セス (明治

二十五年十二月大審院判決)

債務者假差押ニ對シ債權者ノ請求虛偽ナルヲ理由トシテ異議ヲ申立ツルコトヲ得ス (法曹會

決議)

第七百四十一條 假差押ノ申請ニ付テノ裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得

請求又ハ假差押ノ理由ヲ疏明セサルトキト雖モ假差押ニ因リ債務者ニ生スヘキ損害ノ爲メ債權者カ裁判所ノ自由ナル意見ヲ以テ定マル保證ヲ立テタルトキハ裁判所ハ假差押ヲ命スルコトヲ得
又請求及ヒ假差押ノ理由ヲ疏明シタルトキト雖モ裁判所ハ保證ヲ立テシメ假差押ヲ命スルコトヲ得

保證ヲ立テタルトキハ其保證ヲ立テタルコト及ヒ如何ナル方法ヲ以テ之ヲ立テタルコトヲ假差押ノ命令ニ記載スヘシ

本條ハ假差押ノ申請手續ヲ規定ス

第一項 假差押ノ申請コ付テノ裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得ヘキモノトス、而シテ假令口頭辯論ヲ爲スモ疏明スルマテニテ足ルヘシ別ニ證人等ヲ訊問スルニ及ハサルヘシ

第二項 請求又ハ假差押ノ理由ハ之ヲ疏明スヘキモノナリ、然レトモ假令疏明セサルトキト雖モ保證ヲ立ツルトキハ假差押ヲ命スルコトヲ得ヘキモノトス、其保證ハ裁判所カ自由ナル意見ヲ以テ之ヲ定ムルニアリ

第三項 又假令請求又ハ假差押ノ理由ヲ疏明シタルトキト雖モ裁判所ハ保證ヲ立テシメ假差押ヲ命スルコトヲ得ヘシ、之レ假令疏明スルモ債務者コ損害ヲ生スルノ慮アルトキアレハナリ
第四項 保證ヲ立テタルトキハ保證ヲ立テタルコト(一)如何ナル方法ヲ以テ之ヲ立テタルコト(二)ナ假差押命令ニ記載スヘキモノトス、之レ債務者ヲシテ知ラシムルニ外ナラス
假差押申請者カ本案請求立タスシテ敗訴スルトキハ不當ニ他人ノ財産ヲ差押ヘタルモノナルヲ以テ之ニ因リ生シタル損害ニ付テハ其責ニ任スヘキモノトス(明治二十八年十月大審院判決)

第七百四十二條 假差押ノ申請ニ付テノ裁判ハ口頭辯論ヲ爲ス場合ニ於テハ終局判決ヲ以テ之ヲ爲シ其他ノ場合ニ於テハ決定ヲ以テ之ヲ爲ス

假差押ノ申請ヲ却下シ又ハ保證ヲ立テシムル裁判ハ債務者ニ之ヲ通知スルコトヲ要セス

本條ハ假差押ノ決定手續ヲ規定ス

第一項 假差押申請裁判ハ二種ニ區別シ、口頭辯論ヲ爲ストキハ終局判決ヲ以テ爲シ(一)其他ノ場合ニ於テハ決定ヲ以テ爲ス(二)

第二項 假差押ノ申請コシテ之ヲ却下シタルトキ又ハ保證ヲ立テシムル裁判ナルトキハ債務者ニ之ヲ通知スルコトヲ必要トス

假差押債權者カ本訴敗訴シ其判決確定シタルトキト雖モ其假差押ハ當然解除セズ債務者カ取消ヲ申立其取消ヲ得ルマテ效力ヲ存シ解除セントセハ解除命令ヲ要ス(明治二十八年五月法曹會決議) 起訴前假差押及ヒ假處分ヲ申請ニ付口頭辯論ヲ爲ストキハ第三者ハ之ニ參加ヲ爲スコトヲ得ヘキモノトス(同年十一月同上)

第七百四十三條 假差押ノ命令ニハ假差押ノ執行ヲ停止スルコトヲ得ル爲メ又ハ執行シタル假差押ヲ取消スコトヲ得ル爲ニ債務者ヨリ供託スヘキ金額ヲ記載ス可シ

本條ハ假差押ヲ停止シ又ハ取消スヘキ場合ヲ規定ス
假差押ハ債權保全ノ爲メ、執行シ能ハサル困難ナルトキニ爲スニアレハ其之カ事柄ヲ除キ得ヘキトキ即チ債權ヲ安全ニ得シルルトキハ別ニ之ヲ爲スノ必要ナキモノナリ、故ニ假差押命令中ニハ假差押ノ執行ヲ停止スルコトヲ得ルカ爲メ(一) 又ハ執行シタル假差押ヲ取消スコトヲ得ル爲メ(二) ハ債務者ニ於テ金額ヲ供託スヘシト記載スヘキモノトス、而シテ此金額ハ債權額及ヒ費用ニ相當スル額ナリトス

第七百四十四條 債務者ハ假差押決定ニ對シ異議ヲ申立ツルコトヲ得
此異議ニ付テハ假差押ノ取消又ハ變更ヲ申立ツル理由ヲ開示ス可シ
異議ノ申立ハ假差押ノ執行ヲ停止セズ
本條ハ異議申立方ヲ規定ス

第一項 債務者ハ假差押決定ニ對シ異議ヲ申立ツルコトヲ得ヘキモノトス、故ニ抗告又ハ訴ヲ以テ爲スコトヲ許サ、ルモノトス

第二項 此異議ニ付テハ假差押ノ取消スヘキコト又ハ變更スヘキコトノ理由ヲ開示スヘキモノトス、蓋シ當然タリ

第三項 異議ノ申立ハ假差押ノ執行ヲ停止セスシテ之ヲ爲ス、異議申立ヲ名トシテ執行ヲ免レントスル徒ナキコアラサレハナリ

假差押決定ニ對スル異議ハ民事訴訟法第七十條ノ第一第二項ノ要件ノ不備ヲ理由トシテ申立ツルモノニシテ本案請求ノ不當ヲ理由トシテ異議ノ申立ヲ爲スナ許スヘキニアラス(明治二十七年七月法曹會決議)

本條第一項ハ債務者カ假差押ニ對シテ異議ヲ申立ツルノ規定ナレハ被差押人カ一旦其假差押ヲ確認シ更ニ理由ノ消滅ヲ申立取消ヲ求ムルトキニ適用スヘキモノニアラス(明治二十六年十月大審院判決)

第七百四十五條 異議ノ申立アリタルトキハ裁判所ハ口頭辯論ノ爲メ當事者ヲ呼出ス可シ

裁判所ハ終局判決ヲ以テ假差押ノ全部若クハ一分ノ認可、變更又ハ取消ヲ言渡シ又自由ナル意見ヲ以テ定ムル保證ヲ立ツ可キコトノ條件ヲ附シテ之ヲ言渡スコトヲ得

本條ハ異議申立アリシトキノ手續ヲ規定ス

第一項 異議ノ申立アリシトキハ口頭辯論ヲ開カサルヘカラス、故ニ之カ爲メニ當事者ヲ呼出スヘキモノトス、

第二項 口頭辯論ヲ開始シ裁判所ハ終局判決ヲ以テ左ノ事項ノ内一ヲ言渡スヘキモノトス

第一 假差押ノ全部又ハ一部ノ認可、變更取消ヲ言渡ス

第二 裁判所ノ定ムル保証ヲ立ツヘキコトヲ條件トシテ言渡ス

モノトス

第七百四十六條

本案ノ未タ繫屬セサルトキハ假差押裁判所ハ債務者ノ申立ニ因リ口頭辯論ヲ經スシテ相當ニ定ムル期間内ニ訴ヲ起ス可キコトヲ債權者ニ命スヘシ

此期間ヲ徒過シタル後ハ債務者ノ申立ニ因リ終局判決ヲ以テ假差押ヲ取消ス可シ

本條ハ本案ノ未タ繫屬セサルトキノ裁判ヲ規定ス

第一項 本案ノ未タ繫屬セサルトキト雖モ第七百二十九條ノ管轄裁判所ニ假差押ノ命令ヲ申請スルコトヲ得ヘキモノトス、此場合ニ於テハ假差押裁判所ハ債務者ノ申立ニ因リ相當ノ期間ヲ定メ夫マテニ債權者ニ於テ訴訟ヲ起スヘシトノ命令ヲ爲スヘキモノトス、蓋シ假差押ハ債權ノ保全ノ爲メニ爲スモノナレハ可成の速ニ本案ニ付キ曲直ヲ判斷セラレサルハ債務者ハ

實ニ執行セラレツ、迷惑ヲ來タスヲ以テナリ

第二項 債權者ニ於テ右ノ期間内ニ出訴セサルトキハ債務者ハ申立テ以テ假差押ノ命令ヲ取消サレシコトヲ求ムヘシ又裁判所モ此申立アルトキハ終局判決ヲ以テ之カ取消ヲ命スヘキモノトス

第七百四十七條

債務者ハ假差押ノ理由消滅シ其他事情ノ變更シタルトキ又ハ裁判所ノ自由ナル意見ヲ以テ定ム可キ保證ヲ立テントノ提供ヲ爲シタルトキハ假差押ノ認可後ト雖モ假差押ノ取消ヲ申立ツルコトヲ得

此申立ニ付テハ終局判決ヲ以テ之ヲ裁判ス其裁判ハ假差押ヲ命シタル裁判所又本案カ既ニ繫屬シタルトキハ本案ノ裁判所之ヲ爲ス

本條ハ假差押取消ノ申立ヲ爲スヘキ場合ヲ規定ス

第一項 債務者ニ於テ假差押ノ理由カ消滅シ(一)其他ノ事情ノ變更シタルトキ(二)裁判所ノ定メタル保証ヲ立テント申出テタルトキ(三)ハ假令假差押ノ認可ヲ爲シタル後ナリト雖モ假差押ノ取消ヲ申立ツルコトヲ得ヘキモノトス、蓋シ債權ニ付キ決シテ心配スヘキコトナキノミナラス已ニ債權ノ保全ノ必要ナキニ至ルレハナリ

第二項 此申立ニ付テハ終局判決ヲ以テ裁判ス、此裁判ハ假差押ヲ命シタル裁判所又ハ本案カ既ニ繫屬シタルトキハ假令始メノ命令ヲ發シタル裁判所ニアラサルモ本案ノ裁判所之ヲ爲

假差押債権者カ本案ニ於テ敗訴シ其判決確定シタル場合ニテモ其假差押ハ當然解除スヘキモノニ非スシテ債務者カ假差押ノ取消ヲ申立其取消ヲ得ルマテハ依然効力アルモノナシハ之ヲ解除セントスルニハ解除命令ヲ要ス（法曹會決議）假差押債権者カ第一審ニテ本案敗訴シタルヨリ相手方ハ假差押取消ノ申請ヲ爲シタルトキ該裁判所ハ假差押取消ノ理由トナスコトヲ得ヘシト雖モ必ラスシモ取消ヲ命スルヲ要セス又必スシモ敗訴言渡判決ノ確定ヲ待ツヲ要セス只其事情ヲ斟酌シテ之ヲ許否スル自由ヲ有ス（明治三十一年二月同上）

第七百四十八條 假差押ノ執行ニ付テハ強制執行ニ關スル規定ヲ準用ス但以下數條ニ於テ差異ノ生スルトキハ此限ニ在ラス

本條ハ執行手續ヲ規定ス

假差押ハ債權保全ノ爲メニ爲スヘキモノナレハ之カ執行ヲ爲シテ安全ナラシムルニアリ、故ニ常ニ其執行ニ付テハ強制執行ニ關スル規定ヲ準用スルモノトス、尤トモ本來ノ性質ニ於テ少シク異ナルモノナルヲ以テ其異ナル點ニ付テハ以下數條ニ之ヲ定ム

第七百四十九條 假差押ノ命令ニハ其命令ヲ發シタル後債権者又ハ債務者ニ於テ承繼アル場合ニ限り執行文ヲ附記スルコトヲ要ス
假差押命令ノ執行ニ命令ヲ言渡シ又ハ申立人ニ命令ヲ送達シタルヨリ十四日ノ期間ヲ徒過スルトキハ之ヲ爲スコトヲ許サス

右執行ハ債務者ニ差押命令ヲ送達スル前ト雖モ之ヲ爲スコトヲ得

本條ハ執行文付與及ヒ執行時期ヲ定ム

第一項 假差押ノ命令ハ元來執行文ノ附與ヲ要セスシテ之カ執行ヲ爲スヘキ効力アルモノナリ、然レトモ命令ヲ發シタル後債権者又ハ債務者ニ於テ承繼アルトキニ限リテ執行文ヲ附記スヘキモノトス、蓋シ此場合ハ當事者ヲ異ニスルヲ以テノ故ナリ

第二項 假差押命令ノ執行ハ常ニ速カニ爲スモノナリ、即チ債權保全ノ旨趣ヲ貫徹スルカ爲メナリシ、然ルニ命令ヲ言渡シ又ハ命令ヲ送達シタルヨリ十四日ノ期間ヲ徒過スルモノ之ヲ爲サ、ルカ如キハ之レ其必要ナキカ爲メニ外ナラス故ニ此場合ニ在テハ之カ執行ヲ許サ、ルモノトス

第三項 右ノ執行ハ債務者ニ差押命令ヲ送達スル以前ニ於テモ之ヲ爲スコトヲ得ヘシ、即チ上訴ノ性質アラサレハ送達ヲ必要ト爲サ、ルナリ

債務者死亡ノ後相續人カ其不動産ノ相續登記ヲ未タ終ラサル間ト雖モ債権者ハ之カ假差押ヲ爲スコトヲ得ルモノトス（明治二十八年法曹會決議）

第七百五十條 動産ニ對スル假差押ノ執行ハ各差押ト同一ノ原則ニ從
ヒテ之ヲ爲ス
債權ノ假差押ニ付テハ其命令ヲ發シタル裁判所ヲ管轄執行裁判所トス

債權ノ假差押ニ付テハ第三債務者ニ對シ債務者ニ支拂ヲ爲スコトヲ禁スル命令ノミヲ爲ス可シ

假差押ノ金錢ハ之ヲ供託ス可シ其他假差押物ノ競賣及ヒ假差押有價證券ノ換價ハ一時之ヲ爲サス然レトモ假差押物ニ著シキ價額ノ減少ヲ生スル恐アルトキ又ハ其貯藏ニ付キ不相應ナル費用ヲ生ス可キトキハ執行裁判所ハ申立ニ因リ其物ヲ競賣シ賣得金ヲ供託ス可キ旨ヲ執達更ニ命スルコトヲ得

本條ハ各種ノ財産ニ對スル執行ノ手續ヲ規定ス

第一項 動産ニ對スル假差押ノ執行ニ付テハ各差押ト同一ノ原則ニ從ヒテ之ヲ爲スヘキモノトス、故ニ執達更ニ於テ之ヲ共有スヘキモノナリ、

第二項 債權ノ假差押ニ付テハ其命令ヲ發シタル裁判所ヲ以テ管轄裁判所トス、之ノ第五百九十五條ノ場合ト異ナルモノナリ

第三項 債權ノ假差押ニ付テハ第三債務者ニ對シ債務者ニ支拂ヲ爲スコトヲ禁止スル命令ヲノミ爲スヘキモノトス第五百九十八條ノ如ク取立債務者ニ對シ取立ヲ爲スヘカラストノ禁令ヲ爲サス

第四項 假差押ノ金錢ハ之ヲ供託スヘシ、其他執行處分タル假差押物ノ競賣及假差押有價証

券ノ換價ハ一時之ヲ爲サスシテ留保シ置クヘク尤トモ假差押物ニシテ著シキ價額ノ減少ヲ生スル恐レアルトキ(一)貯藏ニ付不相應ナル費用ヲ生スヘキトキ(二)ハ其物ヲ競賣シ其代價ヲ供託スヘキ旨ハ特ニ執行裁判所ヨリ執達更ニ命スヘキモノトス
本條末項ノ競賣ヲ命スルハ債權者又ハ債務者ノ申立アルヲ要ス(明治二十八年十一月法曹會決議)

第七百五十一條 不動産ニ對スル假差押ノ執行ハ假差押ノ命令ヲ登記簿ニ記入スルニ因リテ之ヲ爲ス

本條ハ不動産ニ對スル假差押ノ執行方法ヲ規定ス
不動産ニ對スル假差押ノ執行ハ其假差押ノ命令ヲ登記簿ニ記入スルニ因リテ之ヲ爲スヘキモノトス、強制執行ノ如ク強制競賣ヲ以テ爲スヘキモノニアラス只共ニ強制管理ヲ爲スコトヲ得ルハ次條ノ如シ

第七百五十二條 假差押執行ノ爲メ強制管理ヲ爲ス場合ニ於テハ保全スヘキ債權ニ相當スル金額ヲ取立テ之ヲ供託スヘシ

本條ハ強制管理ヲ爲ストキヲ規定ス
強制管理ヲ爲ス場合ハ第七百七條以下ニ之ヲ規定シタリ、假差押ニ於テハ此強制管理ヲ爲スコトヲ許スハ蓋シ債權保全ノ爲メニハ當然ニシテ換價手續ヲ爲サ、ルヲ以テノ故ナリトス、而シテ其管理スヘキ高ニ於テモ保全スヘキ債權ニ相當スル金額ヲ以テ限度トシ其取立タル金

額ハ供託スヘキモノトス

第七百五十三條

船舶ニ對スル假差押ノ執行ハ假差押ノ當時碇泊スル港ニ碇泊セシムルコトニ因リテ之ヲ爲ス裁判所ハ債權者ノ申立ニ因リ船舶ノ監守及ヒ保存ノ爲メ必要ナル處分ヲ爲ス

本條ハ船舶ニ對スル假差押ヲ規定ス

船舶ニ對スル假差押ノ執行ハ假差押ノ當時碇泊スル港ニ碇泊セシムルコトヲ命スルニ依リテ爲スモノトス、之レ強制執行ト異ナル點トス強制執行ハ競賣ヲ爲スニアレトモ假差押ハ債權確定セサル保全ニ關スルカ故ナリ

裁判所ハ債權者ノ申立ニ因リ船舶ノ監守及ヒ保存ノ爲メ必要ナル處分ヲ爲スヘキモノトス、之レ必要ニシテ假差押ヲ受ケタル債務者ハ其船舶ニ對シテ冷淡ナルコトアレハ從テ保全上トニ損害ヲ被ムルコトアルヘキナリ

第七百五十四條

假差押命令ニ於テ定メタル金額ヲ供託シタルトキハ執行裁判所ハ執行シタル假差押ヲ取消ス可シ

假差押ノ續行ニ付キ特別ノ費用ヲ要シ且之カ爲メ必要ナル金額ヲ債權者カ豫納セサルトキモ亦執行裁判所ハ假差押ノ取消ヲ命スルコトヲ得

右裁判所ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得

假差押ヲ取消ス決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

本條ハ假差押命令ノ取消ヲ定ム

第一項 假差押ノ命令ヲ取押スヘキコトニ付テハ第七百四十三條第七百四十五條第七百四十七條ニ依リテ之ヲ定ム、然シテ其命令ニ記載シタル金額ヲ供託シタルトキハ最早債權者ニ於テ損害ヲ受クル念ナキモノナレハ假令已ニ執行シタルモノト雖モ之カ假差押ヲ取消スヘキモノトス

第二項 債權者ニ於テハ假差押ヲ執行スルニ付キ特別ナル費用ヲ要シ又ハ之カ爲メニ必要ナル金額ハ之カ豫納シテ目的ヲ達セサルヘカラサルニモ拘ハラズ之ヲ豫納セサルトキハ執行裁判所ハ假差押ノ取消ヲ命スヘキモノトス、之レ自ラ進メテ爲サ、ルハ之カ必要ナラサルモノト看做スヘキカ故ナリ

第三項 第二項及ヒ第二項ノ裁判ハ口頭辯論ヲ以テ爲スコトヲ得ヘキモ亦之ヲ經スシテ爲スコトヲモ爲シ得ヘシ

第四項 假差押ヲ取消ス決定ニ對シテハ即時抗告スルコトヲ得ヘシ

第七百五十五條

係爭物ニ關スル假處分ハ現狀ノ變更ニ因リ當事者一方ノ權利ノ實行ヲ爲スコト能ハス又ハ之ヲ爲スニ著シキ困難ヲ生スル恐アルトキ之ヲ許ス

本條ハ假處分ヲ爲スヘキ手續ヲ定ムルモノナリ

假處分ヲ爲スニハ現狀ヲ變更セラルルトキハ假令判決ニ於テ勝利ヲ得ルモ實行スルコトヲ得
ス又ハ著シキ困難ヲ生スルノ恐レアルトキノ如キ場合ニ於テ之ヲ爲スコトヲ得ヘキモノトス
、故ニ假處分ヲ爲スニハ實行スルコト能ハス又假令實行シ得ヘキモ著シキ困難ヲ生スルトキ
ニアリ、例ヘハ甲乙家屋ノ所有權ヲ爭フニ際シ其中ノ占有者ニ於テ其家ヲ取毀ストキハ後日
勝訴トナルモ之カ回復ニ困難ナルヲ以テ假處分ヲ求メテ其家ヲ判決アレハ其儘ニ保存セシ
ムルカ如シ

第七百五十六條 假處分ノ命令其他ノ手續ニ付テハ假差押ノ命令及ヒ
手續ニ關スル規定ヲ準用ス但以下數條ニ於テ差異ノ生スルトキハ此
限ニ在ラス

本條ハ假處分ヲ爲ス手續ヲ規定ス
假處分ノ命令及ヒ其執行手續ニ付テハ假差押ト同一ナレトモ其性質ノ異ナルニ依リテ差異ノ
生スルトキハ此限ニアラス即チ下ノ數條ニ其異ナル点ヲ規定スルニアリ
假處分ヲ以テ裁判所カ決定ニ依リ被上告人ニ對シ或行爲ノ禁止ヲ命令シタル場合ニハ其決定
書ヲ被上告人ニ對シ送達シ終リタル以上ハ別ニ執達吏ヲシテ執行ヲ爲サシムヘキモノニ非ラ
ス從テ假差押命令ノ場合トハ自ラ差違アルヲ以テ假處分送達ヲ十四日ノ期間内ニ執行セサリ
シトテ假處分ヲ取消スヘキモノニ非ラス (明治二十八年六月大審院判決)

第七百五十七條 假處分ノ命令ハ本案ノ管轄ス

右裁判ハ急迫ナル場合ニ於テハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ
得

本條ハ假處分ノ管轄裁判所ヲ規定ス

第一項 假處分ノ命令ハ本案ノ管轄裁判所之ヲ管轄ス、蓋シ係爭物カ果シテ假處分ヲ爲スヘ
キ必要ヲ有スルヤ否ヤハ本案ノ裁判所ニアラサルハ知ルヘカラス、尤モ急迫ナル場合ニ於テ
ハ第七百六十一條ノ例外ナキニアラサルモ之レ必ラス本案ノ裁判所ニ相手方ヲ呼出スヘキコ
トヲ規定シタルカ如シ

第二項 本案ノ裁判所ニ於テハ必ラス口頭辯論ヲ爲シテ命令ヲ發スヘシ、之レ第一項ノ理由
ノ如シ然レトモ急迫ナルトキハ其暇アラス故ニ此場合ニ於テハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲ス
コトヲ得ヘキモノトス

第七百五十八條 裁判所ハ其意見ヲ以テ申立ノ目的ヲ達スルニ必要ナル
處分ヲ定ム

假處分ハ保管人ヲ置キ又ハ相手方ニ行爲ヲ命シ若クハ之ヲ禁シ又ハ
給付ヲ命スルコトヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得
假處分ヲ以テ不動産ヲ讓渡シ又ハ抵當ト爲スコトヲ禁シタルトキハ
裁判所ハ第七百五十一條ノ規定ヲ準用シテ登記簿ニ其禁止ヲ記入セ

本條ハ假處分上必要ナル處分ヲ爲ス手續ヲ規定ス

第一項 假處分ノ理由ハ已ニ説明シタルカ如ク現狀ノ變更ヲ憂慮スルコト出テタルモノナレハ裁判所ハ其目的ヲ達スルニ必要ナル處分ヲ定ムルモノトス、其處分トハ本條ノ如キ處分ヲ爲スニアルヘシ

第二項 假處分ヲ爲スニ付其目的ヲ達セント欲セハ保管人ヲ置キ(一)相手方ニ行爲ヲ命ジ(二)之ヲ禁ジ(三)給付ヲ命ス(四)之等何レモ其場合ニ依リテ隨意ニ處分ヲ命スルモノトス例ヘハ家屋ヲ毀ツカ如キハ之ヲ禁スルカ如ク又ハ腐敗ヲ防ク行爲ヲ命スルカ如ク種々ナリトス
第三項 假處分中其目的物ノ不動産ナルトキハ之カ登記簿ニ記入シテ其不動産ヲ讓渡シ又ハ抵當典物ト爲スコトヲ禁止スルモノトス

訴訟中假處分トシテ讓渡負擔若クハ質入ヲ禁セラレタル不動産ト雖モ他ノ確定判決ノ効力ニ依リ且執行トシテ登記簿上勝訴者ノ所有名義ニ書替ノ登記ヲ爲スコトヲ得(明治二十八年二月法曹會決議)

第七百五十九條 特別ノ事情アルトキニ限り保證ヲ立テシメ假處分ノ

取消ヲ許スコトヲ得

本條ハ假處分取消ノ場合ヲ規定ス

特別ノ事情アルトキ即チ裁判所ニ於テ假處分ヲ續行スルコトノ困難ナル場合ナリトスルトキ

ハ保證ヲ立テシメ以テ假處分ヲ取消スコトヲ得ヘシ、尤トモ申立アルトキハ其事情ノアル場合ニ於テモ亦同一トス

第七百六十條 假處分ハ争アル權利關係ニ付キ假ニ地位ヲ定ムル爲ニ

モ亦之ヲ爲スコトヲ得但其處分ハ殊ニ繼續スル權利關係ニ付キ著シキ損害ヲ避ケ若クハ急迫ナル強暴ヲ防ク爲メ又ハ其他ノ理由ニ因リ之ヲ必要トスルトキニ限ル

本條ハ假處分ヲ爲ス他ノ場合ヲ規定ス

假處分ヲ爲スハ争アル權利關係ニ付キ假ノ地位ヲ定ムル爲ニモ之ヲ爲スコトヲ得ヘシ假令ハ甲乙互ヒニ所有權ヲ争フモノアルトキハ其物ハ何レノ屬スルヤヲ假リニ定ムヘシ然ラサレハ其物ニ於テ損害ヲ加フルコトノ恐レアリシカ如キ類ナリトス、而シテ此處分ハ繼續スル權利關係ニ付著シキ損害ヲ避ケ若クハ急迫ナル強暴ヲ防クカ爲メナルトキ又ハ其他總テ正當ナリトスル理由ニ因リ之ヲ必要ナリトスルトキニ限ルモノトス

第七百六十一條 急迫ナル場合ニ於テハ係争物ノ所在地ノ管轄スル區

裁判所ハ假處分ノ當否ニ付テノ口頭辯論ノ爲メ本案ノ管轄裁判所ニ相手方ヲ呼出ス可キ申立ノ期間ヲ定メ假處分ヲ命スルコトヲ得

此期間ヲ徒過シタル後區裁判所ハ申立ニ因リ其命シタル假處分ヲ取消

ス可シ

右裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得

本條ハ裁判所ヲ特定シタル規定トス

第一項 假處分ヲ申請スルハ第七百五十七條ニ依リ本案ノ管轄裁判所之ヲ管轄スルヲ原則トス、然レトモ事ノ急迫ナルトキハ係争物ノ所在地ヲ管轄スル區裁判所ニ於テ假處分ニ付當否ヲ判斷シ一ノ條件ヲ以テ假處分ヲ命スヘキモノトス、而シテ其條件ハ口頭辯論ノ爲メ本案ノ管轄裁判所ニ相手方ヲ呼出スヘキノ申立期間ヲ定ムルニアリトス
第二項 此區裁判所カ定メタル期間ヲ徒過シタルトキハ債務者ハ區裁判所ニ申立假處分ノ取消ヲ求ムヘキモノトス
第三項 右區裁判所カ爲メ裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ爲スコトヲ得ヘキモノトス

第七百六十二條 本章ノ規定ニ於ケル本案ノ管轄裁判所ハ第一審裁判

所トス但本案カ控訴審ニ繫屬スルトキニ限り控訴裁判所トス

本條ハ本案ノ裁判所ノ種類ヲ定ム

假差押、假處分ノ管轄裁判所ハ物件所在地ノ區裁判所若クハ本案ノ管轄裁判所ナリトス、而シテ此本案ノ裁判所ハ本案ノ訴訟ヲ管轄スヘキ第一審ノ裁判所タルコトヲ定メタルモノナリ然レトモ時ニ本案ハ第二審又ハ第三審ニ繫屬スル場合アルヘク其繫屬スルトキニ於テ假差押又ハ假處分ヲ求メントスルカ如キコト之レアラスト云フヘカラス、此場合ニ於テハ本案ノ管轄裁判所ト第一審ニ限ラス控訴裁判所モ亦本案ノ管轄裁判所トシテ假差押又ハ假處分ヲ爲ス

コトヲ得ヘキモノトス

第七百六十三條 急迫ナル場合ニ於テ口頭辯論ヲ要セサルモノニ限り

裁判長ハ本章ノ申立ニ付キ裁判ヲ爲スコトヲ得

本條ハ急迫ナル場合ノ裁判ヲ規定ス

假差押又ハ假處分ハ何レモ區裁判所ニアラサルトキハ地方裁判所以上ナルヲ以テ會議体ニ依リテ之カ命令ヲ發シ又ハ其異議ニ付裁判スヘキモノナリ、然ルニ其急迫ナル場合ニ於テハ其手續ヲ爲スニ暇アラス故ニ裁判長ノミニ於テ之カ裁判ヲ爲スヘキコトヲ許シタリ尤トモ口頭辯論ヲ爲スヘキモノハ急迫ヲ要セサルニ外ナラサレハ決シテ裁判長ノミニ裁判ヲ爲スコトヲ許サス必ラス會議制ヲ以テ爲スヘキモノトス

第七編 公示催告手續

本編ハ公示催告手續ヲ規定ス

公示催告トハ債務者カ失踪若クハ不在ナル場合ニ於テ權利ノ届出若クハ請求ノ届出ヲ爲スカ或ハ裁判上ノ方式ヲ履行スルコアラサレハ權利ヲ失フニ至ル場合ニ於テ其債務者ニ對スル催告ヲ公示スル方法ナリトス、即チ裁判ヲ經ルニ由シナキモノ、損失ヲ防クカ爲メニ債權者ノ爲スヘキ手續ヲ規定シタルニアリトス

第七百六十四條 請求又ハ權利ノ届出ヲ爲サシムル爲メノ裁判上ノ公

示催告ハ其届出ヲ爲ササルトキハ失權ヲ生ズル效力ヲ以テ法律ニ定

メタル場合ニ限り之ヲ爲スユトヲ得
公示催告手續ハ區裁判所之ヲ管轄ス

本條ハ公示催告ヲ爲スヘキ場合ヲ規定ス

第一項 裁判上ノ公示催告ハ請求又ハ權利ノ届出ヲ爲スヘク其届出ナキトキハ權利ヲ失フヘシトノ條件ヲ以テ爲ス強力アル方法ナリトス、而シテ法律ニ定メタル場合ニ限ルモノニシテ如何ナル場合ニテモ爲シ得ヘキモノト云フヘカラス、而シテ請求又ハ權利ノ届出ヲ求ムルトハ請求者ハ何人ナルヤ知ルヘカヲサル場合ニ在テ我々ニ對シテ請求スル權利アル人々ハ請求シ來ラルヘシト云フニアリ又相續權者ナキトキノ如キ相續權ヲ有スル人ハ其權利アルコトヲ届出アルヘシト云フカ如シ

第二項 公示催告手續ハ區裁判所之ヲ管轄ス其金額ノ多少ヲ問ハス事件ノ何タルヲ問ハサルモノトス

第七百六十五條 公示催告ノ申立ハ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スユトヲ得

此申立ニ付テノ裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スユトヲ得
申立ヲ許ス可キトキハ裁判所ハ公示催告ヲ爲ス可ク其公示催告ニハ殊ニ左ノ諸件ヲ掲ク可シ

第一 申立人ノ表示

第二 請求又ハ權利ヲ公示催告期日マテニ届出ツ可キユトノ催告

第三 届出ヲ爲ササルニ因リ生ス可キ失權ノ表示

第四 公示催告期日ノ指定

本條ハ公示催告申立方法及ヒ裁判手續ヲ規定ス

第一項 公示催告ノ申立ハ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スユトヲ得ヘキモノナリ

第二項 此申立ニ付テノ裁判ハ第一項ノ方法如何ヲ論ヒス口頭辯論ヲ許サスシテ之ヲ爲スユトヲ得ヘシ、尤トモ口頭辯論ヲ爲ス場合ト雖モ決定ヲ以テ言渡スモノナリ

第三項 公示催告ノ申立ハ之ヲ許スト許サ、ルトノ二者アリテ其許可セサルトキハ棄却裁判ヲ下シ其申立人ハ第四百五十五條ニ依テ抗告スルコトヲ得ヘキモノナリ、之ニ反シテ許可スルトキハ裁判所ハ公示催告ヲ爲スヘク其公示催告ニハ本項ノ諸件ヲ掲クヘシ、而シテ何レモ公示催告ヲ申立タルハ其事由、期日等條件ヲ具備スルニアリ

第七百六十六條 公示催告ニ付テノ公告ハ裁判所ノ掲示板ニ揭示シ及

ヒ官報又ハ公報ニ掲載シテ之ヲ爲シ其他法律ニ別段ノ規定ヲ設ケサルトキハ第五百五十七條第三項ノ規定ニ從ヒテ之ヲ爲ス

本條ハ公示催告ノ公告方法ヲ規定ス

公示催告ノ公告ハ必ラス裁判所ノ掲示板ニ揭示シ(一)官報又ハ公報ニ掲載シ(二)之ヲ爲スヘキモノトス其他法律ニ別段ノ規定アルトキハ之ニ從フヘキハ當然ナレトモ若シ之カ規定セザルトキハ第五百五十七條第三項即チ裁判所、當事者、公示催告ノ事由等ヲ掲載スルモノトス

第七百六十七條 公示催告ヲ官報又ハ公報ニ掲載シタル日ト公示催告ノ期日トノ間ニハ法律ニ別段ノ規定ヲ設ケサルトキハ少ナクトモ三個月ノ時間ヲ存スルコトヲ要ス

本條ハ公示催告ノ時間ヲ示ス
公示催告ヲ官報又ハ公報ニ掲載シタル日ト公示催告ノ期日トノ間ニハ法律上別段ノ規定ヲ設ケテ日子ヲ定ムルモ其規定ナキトキハ少ナクトモ二ヶ月ノ時間ヲ存スルコトヲ要ス、其餘リ餘地ナキトキハ其效能ナキニ終ルノミナラス周知マテニハ及ハサルモ大概知リ得ヘキ程度ヲ知ルハ二ヶ月間ハ餘地ヲ加ヘサルヘカラス

第七百六十八條 公示催告期日ノ終リタル後ト雖モ除權判決前ニ届出ヲ爲ストキハ適當ナル時間ニ之ヲ爲シタルモノト看做ス

本條ハ届出ノ有效ナルコトヲ規定ス
公示催告ハ其期日ヲ定メテ之ヲ爲シ其期日ヲ經過スルトキハ權利ヲ失フヘキ旨ヲ表示セルモノナリ、故ニ債務者タルモノハ其期日カ經過スルトキハ除權判決アリコトヲ申立テ除權判決ヲ受クヘキモノトス、然ルニ其期限ヲ經過スルモ未タ除權判決ヲ爲サ、ル間ニ於テ權利又

ハ請求ノ届出アリシトキハ如何トノ問題ナリトス、此場合ニ於テノ届出ハ矢張適當ナル時間即チ公示催告期日内ニ届出タルモノト爲スニアリ蓋シ權利又ハ請求ナリト雖モ之ヲ有效ナラシメントノ意ヨリ出テ公示催告ヲ爲シタルモノナリ未タ除權判決ヲ下サ、ル間ナレハ之ヲ有效トスルハ却テ本人ノ意思ニ適シタルモノト云フヘキナリ

第七百六十九條 除權判決ハ申立ニ因リテ之ヲ爲ス

右判決前ニ詳細ナル探知ヲ爲ス可キ旨ヲ命スルコトヲ得
除權判決ノ申立テ却下スル決定及ヒ除權判決ニ付シタル制限又ハ留保ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

本條ハ除權判決ヲ爲スヘキ手續ヲ規定ス

第一項 除權判決トハ届出ヲ爲ササルニ因リ生スヘキ失權ヲ判決ヲ以テ定ムルモノヲ云フ、之レ公示催告ヲ爲スヘキ主眼タルヘキモノナリ、而シテ告ケナケレハ理セサルノ原則ニ依リ必ラス申立ヲ爲スヘキモノトス

第二項 右判決前ニ詳細ナル探知ヲ爲スヘキ旨ヲ申立人ニ命スヘキモノトス、蓋シ苟モ債權ヲ失ハシムルカ如キ貴重ナル手續ナルヲ以テ十分ナル調査ヲ爲サシムルヲ以テ必要ナリトス而シテ探知トハ証據調、訊問等ヲ包含ス

第三項 除權判決ノ申立テ却下スル決定(一)除權判決ニ付シタル制限例ヘハコレノ分ハ除權ヲ爲スト云フカ如キ場合(二)留保例ヘハ債權ノ申出時期ヲ保タシムル等ノ場合(三)ニ於

○第七編公示催告手續

テハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得ヘキモノトス

第七百七十條 申立人ノ申立ノ理由トシテ主張シタル權利ヲ争フコトノ届出アリタルトキハ其事情ニ從ヒテ届出テタル權利ニ付テノ裁判確定スルマテ公示催告手續ヲ中止シ又ハ除權判決ニ於テ届出テタル權利ヲ留保ス可シ

本條ハ公示催告ノ中止及ヒ除權判決ニ於ケル權利届出ノ留保ヲ規定ス

除權判決ノ申立人ニ於テ其申立ノ理由トスル權利ヲ反對ニ争フ者ハ届出アリタルトキ其申立人ノ主張カ正當ナリヤ否ヤ又届出ノ申立カ正當ナリヤ否ヤ事實ヲ審理セサレハ確定セス、故ニ此場合ニ於テハ公示催告手續ヲ中止シ又ハ除權判決ヲ爲スモ届出タル權利ハ争フコトヲ得ヘキ旨即チ留保ヲ爲スヘキモノトス、而シテ此場合ニ於テハ申立人ハ即時抗告スルコトヲ得ヘシ

第七百七十一條 申立人カ公示催告期日ニ出頭セサルトキハ其申立ニ因リ新期日ヲ定ム可シ此申立ハ公示催告期日ヨリ六ヶ月ノ期間内ニ限り之ヲ爲スコトヲ許ス

本條ハ申立人ノ出頭セサリシトキノコトヲ規定ス

申立人ニ於テ公示催告期日ニ出頭シテ權利ノ届出ノ有無ヲ聽キ以テ申出アルトキハ之ヲ調査

スヘク之カ届出ナキトキハ除權判決ノ申立ヲ爲スヘキモノナレトモ其期日ニ出頭セサルトキハ届出人ヨリ新期日ヲ定メシコトノ申立ヲ爲スヘキモノトス、之レ申立人ト届出人トノ口頭辯論期日トス、尤トモ此期限ハ公示催告期日ヨリ六ヶ月ノ期間内ハ之ヲ許スヘシ、之レ他ノ場合ヨリ永キハ事体其モノニ付テモ急速ナラサルカ爲メナリ

第七百七十二條 公示催告手續ヲ完結スル爲メ新期日ヲ定メタルトキハ其期日ノ公告ヲ爲スコトヲ要セス

本條ハ公示催告ノ新期日ヲ爲メタル場合ヲ規定ス

一度期日ヲ定ムルモ未タ完結ニ至ラサルヲ以テ更ニ新期日ヲ定メタルトキハ其期日ノ公告ヲ爲スコトヲ要セサルモノトス、蓋シ公示催告手續ノ引續キナルヲ以テナリ

第七百七十三條 裁判所ハ除權判決ノ重要ナル旨趣ヲ官報又ハ公報ニ掲載シテ公告ヲ爲スコトヲ得

本條ハ除權判決ノ規定ス

除權判決ヲ爲シタルトキハ裁判所ニ於テハ其除權判決ノ重要ナル旨趣即チ除權判決ニテ下シタル主文及ヒ理由ノ主ナルモノノミヲ官報又ハ公報ニ掲載スヘキモノトス、蓋シ之ヲ掲載スルハ知ラシムルモノニシテ又旨趣トセシハ全部ニ涉リテ或ハ不必要ナル分モアルヘキニ依リ之カ取捨スルコトヲ許シタルニアリ

第七百七十四條 除權判決ニ對シテハ上訴ヲ爲スコトヲ得ス

テハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得ヘキモノトス

第七百七十條

申立人ノ申立ノ理由トシテ主張シタル權利ヲ争フコトノ届出アリタルトキハ其事情ニ從ヒテ届出テタル權利ニ付テノ裁判確定スルマテ公示催告手續ヲ中止シ又ハ除權判決ニ於テ届出テタル權利ヲ留保ス可シ

本條ハ公示催告ノ中止及ヒ除權判決ニ於ケル權利届出ノ留保ヲ規定ス

除權判決ノ申立人ニ於テ其申立ノ理由トスル權利ヲ反對ニ争フ者ハ届出アリタルトキ其申立人ノ主張カ正當ナリヤ否ヤ又届出ノ申立カ正當ナリヤ否ヤ事實ヲ審理セサレハ確定セス、故ニ此場合ニ於テハ公示催告手續ヲ中止シ又ハ除權判決ヲ爲スモ届出タル權利ハ争フコトヲ得ヘキ旨即チ留保ヲ爲スヘキモノトス、而シテ此場合ニ於テハ申立人ハ即時抗告スルコトヲ得ヘシ

第七百七十一條

申立人カ公示催告期日ニ出頭セサルトキハ其申立ニ因リ新期日ヲ定ム可シ此申立ハ公示催告期日ヨリ六ヶ月ノ期間内ニ限り之ヲ爲スコトヲ許ス

本條ハ申立人ノ出頭セサリシトキノコトヲ規定ス

申立人ニ於テ公示催告期日ニ出頭シテ權利ノ届出ノ有無ヲ聽キ以テ申出アルトキハ之ヲ調査

スヘク之カ届出ナキトキハ除權判決ノ申立ヲ爲スヘキモノナレトモ其期日ニ出頭セサルトキハ届出人ヨリ新期日ヲ定メンコトノ申立ヲ爲スヘキモノトス、之レ申立人ト届出人トノ口頭辯論期日トス、尤トモ此期限ハ公示催告期日ヨリ六ヶ月ノ期間内ハ之ヲ許スヘシ、之レ他ノ場合ヨリ永キハ事体其モノニ付テモ急速ナラサルカ爲メナリ

第七百七十二條

公示催告手續ヲ完結スル爲メ新期日ヲ定メタルトキハ其期日ノ公告ヲ爲スコトヲ要セス

本條ハ公示催告ノ新期日ヲ爲メタル場合ヲ規定ス

一度期日ヲ定ムルモ未タ完結ニ至ラサルヲ以テ更ニ新期日ヲ定メタルトキハ其期日ノ公告ヲ爲スコトヲ要セサルモノトス、蓋シ公示催告手續ノ引續キナルヲ以テナリ

第七百七十三條

裁判所ハ除權判決ノ重要ナル旨趣ヲ官報又ハ公報ニ掲載シテ公告ヲ爲スコトヲ得

本條ハ除權判決ノ催告ヲ規定ス

除權判決ヲ爲シタルトキハ裁判所ニ於テハ其除權判決ノ重要ナル旨趣即チ除權判決ニテ下シタル主文及ヒ理由ノ主ナルモノノミヲ官報又ハ公報ニ掲載スヘキモノトス、蓋シ之ヲ掲載スルハ知ラシムルモノニシテ又旨趣トセシハ全部ニ涉リテ或ハ不必要ナル分モアルヘキニ依リ之カ取捨スルコトヲ許シタルニアリ

第七百七十四條

除權判決ニ對シテハ上訴ヲ爲スコトヲ得ス

除權判決ニ對シテハ左ノ場合ニ於テ申立人ニ對スル訴ヲ以テ催告裁
判所ノ所在地ヲ管轄スル地方裁判所ニ不服ヲ申立ツルコトヲ得

第一 法律ニ於テ公示催告手續ヲ爲ス場合ニ非サルトキ

第二 公示催告ニ付テノ公告ヲ爲サス又ハ法律ニ定メタル方法ヲ
以テ公告ヲ爲ササルトキ

第三 公示催告ノ期間ヲ遵守セササルトキ

第四 判決ヲ爲ス判事カ法律ニ依リ職務ノ執行ヨリ除斥セラレタ
ルトキ

第五 請求又ハ權利ノ届出アリタルニ拘ハラヌ判決ニ於テ其届出
ヲ法律ニ從ヒ顧ミサルトキ

第六 第四百六十九條第一號乃至第五號ノ場合ニ於テ原狀回復ノ
訴ヲ許ス條件ノ存スルトキ

本條ハ除權判決ノ上訴ヲ規定ス

第一項 除權判決ニ對シテハ上訴ヲ許ササルヲ原則トス、然レトモ尙ホ救濟ノ方法ヲ必要ト
スル場合ニ在ラハ不服ヲ申立ツルコトヲ許スヘキハ次項ノ如ク

第二項 除權判決ニ對シテ不服アルモノハ本項列記ノ場合ニ限り訴ヲ以テ催告セシ裁判所ノ
所在地ヲ管轄スル地方裁判所ニ申立ツルコトヲ得、此場合ニ於テハ相手方ハ申立人トス、而
シテ何レモ公示催告ヲ爲シ、又ハ除權判決ヲ爲シタルニ付形式的行爲ニノミ屬スル場合タリ

第七百七十五條 不服申立ノ訴ハ一ヶ月ノ不變期間内ニ之ヲ起ス可シ
此期間ハ原告カ除權判決ヲ知リタル日ヲ以テ始マル然レトモ前條第
四號及ヒ第六號ニ掲ケタル不服申立ノ理由ノ一ニ基キ訴ヲ起シ且原
告カ右ノ目ニ其理由ヲ知ラサリシ場合ニ於テハ其期間ハ不服ノ理由
ノ原告ニ知レタル日ヲ以テ始マル

除權判決ノ言渡ノ日ヨリ起算シテ五ヶ年ノ滿了後ハ此訴ヲ起スコト
ヲ得ス

本條ハ不服申立期間ヲ定ム

第一項 不服ノ申立ヲ以テ訴ヲ爲スハ一ヶ月ノ不變期間内ニ爲サ、ルヘカラス、而シテ此一
ヶ月ノ期間ヲ起算スルニハ原告カ除權判決ヲ知リタル日ヲ以テ始マルモノトス、然レトモ前
條第四號即チ判事カ不能力ナリシ故ヲ以テスル不服ノ申立及ヒ第六號即チ原狀回復ヲ許スヘ
キ場合ノ規定ノ原由アリシトキノ不服ノ申立ナルトキハ其訴ヲ起シ且原告カ右ノ目ニ其理由
ヲ知ラサリシ場合ニ於テハ其期間ハ不服ノ理由ノ原告ニ知レタル日ヲ以テ始マルニアリトス
第二項 除權判決ノ言渡ノ日ヨリ起算シテ五年ノ滿了後ハ不服申立ノ訴ヲ起スコトヲ得ス、
之レ餘リ永クナルトキハ舉証ニ困難ヲ生スヘキカ故ナリ

○第七編公示催告手續

第七百七十六條 裁判所ハ第二百二十條ノ條件ノ存セサルトキト雖モ數箇ノ公示催告ノ併合ヲ命スルコトヲ得

本條ハ數個ノ公示催告ノ併合ヲ規定ス

訴ヲ併合スルト同一ノ理由アルトキハ公示催告ニ於テモ併合スルコトヲ命スルモノトス、蓋シ敢テ異ナルモノニアラス只手續ノ異ナルカ爲メナレハ却テ便宜ニ出ツルカ故ナリ、加之例ヘ其併合スヘキ條件ノ存セサルトキ例ヘハ目的物ノ元來一個ノ訴ニテ主張シ得ヘキモノニアラサル場合ニ於テモ尙ホ之ヲ爲スコトヲ得ヘキモノトセリ、別ニ不都合ナル點ナケレハナリ

第七百七十七條 盜取セラレ又ハ紛失若クハ滅失シタル手形其他商法

ニ無効ト爲シ可ヘキコトヲ定メタル證書ノ無効宣言ノ爲ニ爲ス公示催告手續ニ付テハ以下數條ノ特別規定ヲ適用ス

此規定ハ法律上公示催告手續ヲ許ス他ノ證書ニ付キ其法律中ニ特別規定ヲ設ケサル限りハ之ヲ適用ス

本條ハ盜取、紛失、滅失ノ手形其他證書ノ無効宣言ノ場合ヲ規定ス

第一項 手形ヲ盜取セラレ又ハ手形ヲ紛失シ又ハ滅失シタルトキハ所持人ニ於テハ之カ無効ナリトノコトヲ宣言セラレ以テ損害ヲ防カサルヘカラス其他商法上無効ト爲シ得ヘキ證書モ亦同一タリ、何レモ其所持人ノ爲メニ損害ヲ受ケサラントスル防禦手段ニ外ナラス、此場合

ニ於テハ公示催告ヲシテ無効ノ宣言ヲ求ムルニアリ、其手續ハ普通ノ場合ト異ナラシメタリ蓋シ他ノ場合ヨリ迅速ナラシムルコト外ナラス又信用ヲ重メスルカ故ニアリトス

第二項 尤トモ商法ノ如キ特別ニ商法中ニ於テ無効ニ爲ス手續ノ規定アルトキハ本法ノ手續ニ依ル限コアラサルヘシ、只本法ノ手續ニ依ルハ他ノ法律中ニ於テ特別規定ナキトキニ限レハナリ

第七百七十八條 無記名證券又ハ裏書ヲ以テ移轉シ得ヘク且略式裏書

ヲ付シタル證書ニ付テハ最終ノ所持人公示催告手續ヲ申立ル權アリ 此他ノ證書ニ付テハ證書ニ因リ權利ヲ主張シ得ヘキ者此申立ヲ爲ス權アリ

本條ハ無記名証券又ハ裏書証券ニ付テノ手續ヲ規定ス

第一項 無記名証券ノ如キ又ハ裏書ヲ以テ移轉シ得ヘク且略式裏書ヲ付シタル証券ニ付テノ最終所持人ニ於テ公示催告ヲ申立ツル權利ヲ有ス、蓋シ此等ノ証券証券ハ之ヲ所持スルモノ權利者タリ、而シテ公示催告ヲ爲ス人ハ權利者ヲササルヘカラスアルヲ以テノ故ナリ

第二項 第一項以外ノ証券ニ付テハ証券ニ因リテ權利ヲ主張シ得ヘキ者此申立ヲ爲ス權利アリト蓋シ當然ナリ、只果シテ何人カ主張シ得ヘキ權アリヤ否ヤハ裁判所ニ於テ之ヲ鑑別セサルヘカラス

第七百七十九條 公示催告手續ハ證書ニ表示シタル履行地ノ裁判所之

ヲ管轄ス若シ證書ニ其履行地ヲ表示セサルトキハ發行人カ普通裁判
籍ヲ有スル地ノ裁判所之ヲ管轄シ其裁判所ナキトキハ發行人カ發行
ノ當時普通裁判籍ヲ有セシ地ノ裁判所之ヲ管轄ス
證書ヲ發行スル原因タル請求ヲ登記簿ニ記入シタルトキハ其物ノ所
在地ノ裁判所ノ管轄ニ專屬ス

本條ハ公示催告ノ裁判管轄ヲ規定ス

第一項 公示催告手續ノ裁判所ハ證書ニ表示シタル履行地ノ區裁判所之ヲ管轄スヘキモノト
ス、之レ履行地ヲ主トスルハ裁判管轄ノ原則ニ適合セシメタルニアリ、若シ證書ニ其履行地
ヲ表示セサルトキハ、發行人カ普通裁判籍ヲ有ス地ノ裁判所之ヲ管轄ス、又其裁判所ナキトキ
ハ發行人カ發行當時ノ普通裁判籍ヲ有セシ地ノ區裁判所ヲ以テ管理トス

第二項 證書ヲ發行スル原因タル請求ヲ登記簿ニ記入シタルトキハ其物所在地ノ裁判所之ヲ
專屬ス蓋シ不動産ニ關スルカ故ナリ

第七百八十條 申立人ハ申立ノ證據トシテ左ノ手續ヲ爲ス可シ

- 第一 證書ノ謄本ヲ差出シ又ハ證書ノ重要ナル旨趣及ヒ證書ヲ十
分ニ認知スルニ必要ナル諸件ヲ開示スルコト
- 第二 證書ノ盜難、紛失、滅失及ヒ公示催告手續ヲ申立ツルコト

ヲ得ルノ理由タル事實ヲ疏明スルコト

本條ハ申立ノ證據手續ヲ規定ス

公示催告申立人ニ於テ申立ノ證據トシテハ本條二個ノ手續ヲ爲サルヘカラス、即チ第一ハ
證書ノ謄本ヲ差出シ(一)又ハ證書ノ重要ナル旨趣及ヒ證書ヲ十分ニ認知スルニ必要ナル諸件
(二)ヲ開示セサルヘカラス、第二ハ證書ノ盜難、紛失、滅失、及ヒ事實ヲ疏明セサルヘカラス

第七百八十一條 公示催告中ニ公示催告期日マテニ權利ヲ裁判所ニ届
出テ且其證書ヲ提出ス可キ旨ヲ證書ノ所持人ニ催告ス可ク又失權ト
シテ證書ノ無効宣言ヲ爲ス可キ旨ヲ開示ス可シ

本條ハ公示催告中ニ記載スヘキ諸件ヲ規定ス

普通ノ公示催告ヲ爲スモノ、外ニ本條列記ノ諸件ヲ記載スヘキモノトス

- 第一 公示催告ノ期日マテニ權利ヲ裁判所ニ届出ツヘキコト
- 第二 其證書ヲ提出スヘキ旨ヲ證書ノ所持人ニ催告スルコト
- 第三 失權トシテ證書ノ無効宣言ヲ爲スヘキ旨ヲ戒示スルコト

第七百八十二條 公示催告ノ公告ハ裁判所ノ掲示板ニ揭示シ且官報又
ハ公報ニ掲載シ及ヒ新聞紙ニ三回掲載シテ之ヲ爲ス
公示催告裁判所ノ所在地ニ取引所アルトキハ取引所ニモ亦此公告ヲ

○第七編公示催告手續

揭示ス可シ

本條ハ揭示方法ヲ規定ス

公示催告ノ公告ハ左ノ如ク爲スヘキモノトス

第一 裁判所ノ揭示板ニ揭示ス

第二 官報又ハ公報ニ掲載ス

第三 新聞紙ニ三回掲載ス

第四 裁判所々所在地ニ取引所アルトキハ其取引所

而シテ第三ヲ除ク外ハ其期間ナシ又回数ナシ適宜裁判所ニ於テ之ヲ定メテ爲スヘキモノトス

第七百八十三條 公示催告ヲ官報又ハ公報ニ掲載シタル日ト公示催告

期日トノ間ニハ少ナクトモ六ヶ月ノ時間ヲ存スルコトヲ要ス

本條ハ期間ヲ規定ス

公示催告ヲ官報又ハ公報ニ掲載シタル日ト公示催告期日トノ間ニハ少クトモ六ヶ月ノ時間ヲ

存スルコトヲ必要ナリトス、蓋シ餘リ短クスルトキハ其效用ヲ全タカラシムルコト能ハサル

ニ至レハナリ

第七百八十四條 除權判決ニ於テハ證書ヲ無効ナリト宣言ス可シ

除權判決ノ重要ナル旨趣ハ官報又ハ公報ヲ以テ之ヲ公告ス可シ

不服申立ノ訴ニ因リ判決ヲ以テ無効宣言ヲ取消シタルトキハ其判決

ノ確定後官報又ハ公報ヲ以テ之ヲ公告ス可シ

本條ハ除權判決ヲ爲ス手續ヲ規定ス

第一項 除權判決ハ證書ヲ無効ナリト宣言スルニアリ例ヘハ爲替手形ハ無効トス又ハ何々証

券ハ無効トスト云フカ如シ

第二項 除權判決ノ重要ナル旨趣ハ官報又ハ公報ヲ以テ公告スルコトハ普通公示催告ノ場合

ニ同シ

第三項 不服申立ノ訴ニ因リ判決ヲ以テ無効ノ宣言ヲ取消シタルトキハ其判決ノ確定セシ後

ハ官報又ハ公報ヲ以テ之ヲ公告スヘキモノトス、之レ第二項ノ如ク無効ノ宣言ノ判決ヲ公告

セシテ以テ之ヲ取消シタル判決ヲ公告スルコトハ當然ナリトス

第七百八十五條

除權判決アリタルトキハ其申立人ハ證書ニ因リ義務

ヲ負擔スル者ニ對シテ證書ニ因レル權利ヲ主張スルコトヲ得

本條ハ除權判決アリタルトキノ權利ヲ規定ス

除權判決アリタルトキハ其申立人ハ權利ヲ回復スルニアリ即チ何人カ所持シツ、アル手形又

ハ証券又ハ証券ハ無効ト爲ス自己ハ所持セサルモ權利ヲ回復スル結果ト爲ルカ故ニ義務者ニ

對シテ証券ニ因ル權利ヲ主張スルコトヲ得ヘキモノトス、例ヘハ爲替手形ヲ盜取セラレタル

所持人ニ於テ之カ除權判決ヲ受ケタルトキハ其所持人タリシ人ハ裏書人又ハ振出人ニ對シテ

償還請求權ヲ有スルノミナラス、支拂人ニ對シテ支拂ヲ求ムルコトヲ得ヘシ、尤トモ除權判決

○第七編公示催告手續

テ以テ權利者ノ權利ヲ總テ復シタルモノ云云フヘカラス、只證書ニ對シテ其盜難又ハ紛失前ニ有シタル權利ヲ回復セシムルノミ決シテ申立人ト第三者トノ權利關係ニ付テハ何等ノ效ナキモノトス

第八編 仲裁手續

本編ハ仲裁手續ヲ規定ス

夫レ仲裁ニハ双方ノ間ニ介入シテ和解ヲ爲サシムルヲ目的トスルモノニシテ裁判所ノ判決ヲ求メサラシメントスルモノナリ、故ニ仲裁ハ當事者ニ於テ常ニ和解ヲ爲シ得ヘキ事件且和解ヲ爲スヘキ權能ヲ有スル者ノ間ニアラサレハ行ハルルモノニアラサルナリ、本編ハ其仲裁ヲ爲ス手續及ヒ仲裁ノ手續ニ依ルヘキ合意等ヲ規定スルモノトス、而シテ本編ヲ通讀スルトキハ其仲裁手續タル形式的ノモノノミナラス延テ實體上ノモノマテモ之カ親密ヲ爲スニアリ、蓋シ編纂ノ便宜ニ出テタルモノナリ

仲裁判斷ニ依ルトノ合意ヲ爲シタルトキハ裁判所ノ裁判ヲ受クル權利ヲ剝奪シタルモノナリヤ否ヤトノ論アリテ已ニ訴訟ニ及ヒタル事件アリキ、然ルニ大審院ニ於テハ已ニ仲裁手續ニ依ルコトヲ合意シタル以上ハ夫ヲ差置キ裁判所ノ裁判ヲ受クヘキモノニアラス必ラスヤ仲裁ノ判斷ヲ受ケサルヘカラス、即チ合意ハ法律ニ等シキ效力アリトノ格言ノ適用ニ外ナラサルカ

第七百八十六條 一名又ハ數名ノ仲裁人ヲシテ争ノ判斷ヲ爲サシムル

合意ハ當事者カ係争物ニ付キ和解ヲ爲ス權利アル場合ニ限り其效力ヲ有ス

本條ハ仲裁判斷ノ合意ノ效力ヲ規定ス

仲裁判斷ヲ爲スニハ一人又ハ數人ノ仲裁人ヲ選ミテ之ニ争ヲ判斷セシムルモノナリ、而シテ此判斷ヲ爲サシムルハ當事者間ニ於テ合意ヲ爲サ、ルヘカラス、其合意ニシテ有效ナルニハ係争物ニ付和解ヲ爲ス權利ヲ有スル場合ニ限タリ蓋シ仲裁判斷ハ一ノ和解ノ方法ナレハ之ヲ爲サンコトヲ合意スルハ恰モ和解ヲ爲スニアレハ之カ權能ヲ有セサルヘカラス

第七百八十七條 將來ノ争ニ關スル仲裁契約ハ一定ノ權利關係及ヒ其關係ヨリ生スル争ニ關セサルトキハ其效力ヲ有セス

本條ハ將來仲裁契約ノ效力ヲ規定ス

將來ノ争ニ關スル仲裁契約ハ必ラスヤ一定ノ權利關係及ヒ其關係ヨリ生スル争ニ關セサルヘカラス、蓋シ將來ノ争ニシテ一定セサレハ果シテ如何ナル争カ生スルヤ一ニ想像ニ過キサルヲ以テ汎漠ニ失スルノ恐レアルヘキナリ、故ニ必ラスヤ一定ノ關係タラサルヘカラス又夫レヨリ生スル争ナラサルヘカラス

第七百八十八條 仲裁契約ニ仲裁人ノ選定ニ關スル定ナキトキハ當事者ハ各一名ノ仲裁人ヲ選定ス

本條ハ仲裁人選定ヲ規定ス

○第八編仲裁手續

仲裁契約ニハ仲裁人ヲ選定スルモノニシテ其選定ニ關スルコトヲモ定ムルモノナリ例ヘハ仲裁人ハ何某トシ其選定方ハ何某ニ托シテ爲ストカ又ハ何某ニ托シテ相當ノ人ヲ仲裁人ダラシムル等隨意ニ之ヲ定ムルモノトス、然ルニ其定メナキトキハ當事者ハ各一名ノ仲裁人ヲ選定スル權利アリトス、尤トモ仲裁人ハ法人ヲモ定ムルコトヲ得ヘキモノナリ此場合ハ法人ノ代表者ニ於テ仲裁人ヲ爲シ行政廳ノ如キハ其長官之ヲ爲スカ如シ

第七百八十九條

當事者ノ雙方カ仲裁人ヲ選定スル權利ヲ有スルトキハ先ニ手續ヲ爲ス一方ハ書面ヲ以テ相手方ニ其選定シタル仲裁人ヲ指示シ且七日ノ期間内ニ同一ノ手續ヲ爲ス可キ旨ヲ催告ス可シ
右期間ヲ徒過シタルトキハ管轄裁判所ハ先ニ手續ヲ爲ス一方ノ申立ニ因リ仲裁人ヲ選定ス

本條ハ仲裁人ヲ選定スル場合ノ手續ヲ定ム

第一項 當事者双方カ仲裁人ヲ選定スル權利ヲ有スルトキハ何レニテモ先キニ手續ヲ爲シタル一方ハ書面ヲ以テ相手方ニ其選定シタル仲裁人ノ姓名ヲ示シ且七日内ニ同一ノ手續即チ指名スヘキ旨ヲ催告スルモノトス

第二項 右七日ヲ過キタルトキハ先キニ手續ヲナシタル者ヨリ裁判所ニ申立テ以テ裁判所ヨリ仲裁人ヲ選定スヘキモノトス、蓋シ當事者各自カ一名宛選定スヘキモノヲ一名ノミ履行セサルヲ以テ一名ハ裁判所ニ依リテ補欠スルニアリ

第七百九十條

當事者ノ一方ハ相手方ニ仲裁人選定ノ通知ヲ爲シタル後ハ相手方ニ對シテ其選定ニ羈束セラル

本條ハ選定シタルトキノ効力ヲ規定ス

當事者ノ一方カ相手方ニ仲裁人ヲ選定シテ第七百八十九條ノ如ク通知シタル時ハ其相手方モ指示セラレタル仲裁人ニ對スル好人物ヲ選ミ定ムルモノナリ、故ニ若シモ選定後之ヲ變更スルコトヲ得セシムルトキハ相手方モ亦之カ選定ヲ換ヘサルヘカラス此ニ至レハ二者際限ナキニ至ルヘシ、故ニ已ニ通知ノ後ハ決シテ變更スルコトヲ許サス必ラス一旦定メタル以上ハ之ニ羈束セラルルニアリトス

第七百九十一條

仲裁契約ヲ以テ選定シタルニ非サル仲裁人死亡シ又ハ其他ノ理由ニ因リ欠缺シ又ハ其ノ職務ノ引受若クハ施行ヲ拒ミタルトキハ其仲裁人ヲ選定シタル當事者ハ相手方ノ催告ニ因リ七日ノ期間内他ノ仲裁人ヲ選定ス可シ此期間ヲ徒過シタルトキハ管轄裁判所ハ其催告ヲ爲シタル者ノ申立ニ因リ仲裁人ヲ選定ス可シ

本條ハ仲裁人ノ變更ヲ生シタルトキノ選定方ヲ規定ス

仲裁契約ヲ以テ選定シタルニ非サル仲裁人即チ第七百八十八條ニ依ル仲裁人ニシテ死亡シ(一)其他ノ理由ニ依リ欠缺シ(二)職務ノ引受ヲ拒ミ(三)職務ノ施行ヲ拒ミ(四)タルト

キハ其仲裁人ヲ選定シタル當事者ハ相手方ヨリノ催告ニ依リ七日内ニ仲裁人ヲ更ニ選定スヘキモノトス、此七日ヲ徒過シタルトキハ催告シタルモノハ裁判所ニ申立テ更ニ仲裁人ヲ選定セラレシコトヲ求ムヘシ、恰モ第七百八十九條ニ同シ

仲裁契約ヲ以テ定メタル仲裁人ハ第七百九十三條ニ之ヲ規定ス

第七百九十二條 當事者ハ判事ヲ忌避スル權利アルト同一ノ理由及ヒ條件ヲ以テ仲裁人ヲ忌避スルコトヲ得

此他仲裁契約ヲ以テ選定シタルニ非サル仲裁人カ其責務ノ履行ヲ不當ニ遅延スルトキハ亦之ヲ忌避スルコトヲ得

無能力者、聾者、啞者及ヒ公權ノ剝奪又ハ停止中ノ者ハ之ヲ忌避スルコトヲ得

本條ハ仲裁人ヲ忌避スル場合ヲ規定ス

第一項 仲裁人ハ仲裁判斷ヲ爲ス人ニシテ裁判官ニ同シ公平ヲ維持シ苟モ偏頗ノ所置ナキヲ要ス、然ルニ仲裁人ニシテ當事者ト親屬ナルカ又ハ判斷事件ニ付利害ヲ同フスルモノナルカ又ハ仲裁人ニシテ已ニ此事件ノ証人又ハ鑑定人タリシコトアリシカ又ハ一度此事件ノ仲裁人タリシコトアリシヤ等其他偏頗ノ恐れアルモノナルトキハ相手方ヨリ其仲裁人ヲ忌避スルコトヲ得ヘキモノトス之レ第三十二條第三十三條ノ準用スル所トス

第二項 仲裁契約ヲ以テ定メタルニアラサル仲裁人ニシテ其責務ノ履行ヲ不當ニ遅延シタル

トキモ亦忌避スルコトヲ得ヘシ

第三項 無能力者例ヘハ白痴、風癩人ノ如キ幼年者ノ如キ、聾者、啞者及ヒ公權剝奪又ハ停止中ノ者モ之忌避スルコトヲ得ヘシ、蓋シ判斷スヘキ能力ナキ人々ナルコト信用ナキ人々ナルコト勿論ナレハナリ

第七百九十三條 仲裁契約ハ當事者ノ合意ヲ以テ左ノ場合ノ爲メ豫定

ヲ爲ササリシトキハ其效力ヲ失フ

第一 契約ニ於テ一定ノ人ヲ仲裁人ニ選定シ其仲裁人中ノ或ル人カ死亡シ又其他ノ理由ニ因リ欠缺シ又ハ其職務ノ引受ヲ拒ミ又ハ仲裁人ノ取結ヒタル契約ヲ解キ又ハ其債務ノ履行ヲ不當ニ遅延シタルトキ

第二 仲裁人カ其意見ノ可否同數ナル旨ヲ當事者ニ通知シタルトキ

本條ハ仲裁契約ノ効力ヲ失フヘキ場合ヲ規定ス
仲裁契約ヲ爲スニハ

第一 一定ノ人ヲ選定シタルトキ其時ニ其仲裁人中ノ或ル人カ死亡シ又ハ其他ノ理由ニ因リテ欠缺ケ又ハ仲裁引受ヲ拒ミ又ハ仲裁人ノ取結ヒタル契約ヲ解キ又ハ其債務ノ履行ヲ不

第二項 仲裁人カ意見ノ可否同數ナル旨ヲ通知シタルトキ

等ノ場合ニ於テハ他ノ方法ヲ豫メ定メ置クモノナレトモ若シモ其救濟方法ヲ定メ置カサルトキハ仲裁契約ハ無効ナリトス、故ニ當事者ハ更ニ他ノ方法假令ハ訴訟ヲ起スカ如ク又ハ更ニ仲裁契約ヲ取結フカ如ク自由ナリトス

第七百九十四條 仲裁人ハ仲裁判斷前ニ當事者ヲ審訊シ且必要トスル限リハ争ノ原因タル事件關係ヲ探知ス可シ
仲裁手續ニ付キ當事者ノ合意アラサル場合ニ於テハ其手續ニ仲裁人ノ意見ヲ以テ之ヲ定ム

本條ハ仲裁人ノ爲スヘキ手續ヲ規定ス

第一項 仲裁人ハ其仲裁スヘキ事件ニ付キ是非曲直ヲ判斷シ公平無私ヲ以テ仲裁スヘキモノナレハ其判斷スル前ニ於テハ當事者ヲ審訊シ且争点ニ付キ其原因ノ關係ヲ探知スル權ヲ有ス其探知方法ハ別ニ明文ナキモ次條及ヒ第七百九十六條ノ如キハ然リトス

第二項 仲裁手續ニ付キ別ニ全意ナキトキハ其手續ハ仲裁人自ラ定ムヘシ

第七百九十五條 仲裁人ハ其面前ニ任意ニ出頭スル證人及ヒ鑑定人ヲ訊問スルコトヲ得
仲裁人ハ證人又ハ鑑定人ヲシテ宣誓ヲ爲サシムル權ナシ

本條ハ証人鑑定人ヲ訊問スルコトヲ規定ス

第一項 仲裁事件ヲ判斷スルニ付テハ之カ其証人ヲ訊問シ鑑定セシメ及ヒ鑑定人ヲ訊問セサルヘカヲサルモノナレハ其訊問權アルコトヲ規定シタリ、尤トモ彼等ヲ呼出スヘキ權能ハ與ヘサルヲ以テ其訊問スル場合ハ証人又ハ鑑定人等カ任意ニ仲裁人ノ面前ニ出頭シタルトキニアリトス、而シテ証人又ハ鑑定人等ニ對シ出頭方ヲ通知若クハ照會シ得ルコトハ當然トス

第二項 第一項ノ如ク自由出頭ノトキニ於テ之ヲ訊問スヘキコトヲ許スモ決シテ宣誓ヲ爲サシムルコトヲ許サス、蓋シ仲裁判斷ハ裁判權ノ行使ニアラサレハナリ

第七百九十六條 仲裁人ノ必要ト認ムル判斷上ノ行爲ニシテ仲裁人ノ爲スコトヲ得サルモノハ當事者ノ申立ニ因リ管轄裁判所之ヲ爲ス可シ但其申立ヲ相當ト認メタルトキニ限ル

證人又ハ鑑定人ニ供述ヲ命シタル裁判所ハ證據ヲ述フルコト又ハ鑑定ヲ爲スコトヲ拒ミタル場合ニ於テ必要ナル裁判ヲモ亦爲ス權アリ
本條ハ公力ヲ借ルヘキ場合ヲ規定ス

第一項 仲裁事件ノ判斷上必要ナレトモ任意ニ出頭セサル証人又ハ鑑定人ノ如キハ之ヲ訊問スルコト能ハス又檢証ノ如キモ自ラ之ヲ爲スノ權能ナシ其他仲裁人ニシテ爲スコトヲ得サルモノハ當事者ヨリ裁判所ニ申立テ公力ヲ借リテ以テ之カ満足ヲ爲スヘキモノトス、尤トモ裁判所モ申立アルトキハ必ラス之ヲ爲スヘキノ義務ナシ申立ニシテ相當ナリト認メタルトキニ

限ルモノトス

第二項 證人及ヒ鑑定人ニシテ裁判所ヨリ証言若クハ鑑定ヲ命セラレタルトキハ之レノ裁判權ノ行爲ナレハ之ヲ拒ムヘカラス、若シ之ヲ拒ムトキハ必要ナル裁判即チ罰金ヲ言渡スヘク偽證ヲ爲ストキハ刑事ノ處分ヲ爲ス權ヲ有ス

第七百九十七條 仲裁人ハ當事者カ仲裁手續ヲ許ス可カラサルコトヲ主張スルトキ殊ニ法律上有效ナル仲裁契約ノ成立セサルコト、仲裁契約カ判斷ス可キ争ニ關係セサルコト又ハ仲裁人カ其職務ヲ施行スル權ヲキコトヲ主張スルトキト雖モ仲裁手續ヲ續行シ且仲裁判斷ヲ爲スユトヲ得

本條ハ仲裁手續ノ續行及ヒ判斷ヲ爲スコトヲ規定ス
仲裁手續ヲ許スヘカラサルコトヲ主張スルトキ殊ニ

第一 有效ナル仲裁契約ノ成立セサルコト

第二 仲裁契約カ判斷スヘキ争ニ關係セサルコト

第三 仲裁人カ其職務ヲ施行スル權ヲキコト

ヲ主張スルトキハ仲裁手續ヲ續行スルコト能ハス況ンヤ判斷ヲ爲スカ如ハ不法ナレハ之ヲ止ムルカ如キ感アレトモ之レ當事者カ抗辯上之ヲ主張スルニ過キサルモノトシ假令事實上然ルモノナリトスルモ已ニ合意上仲裁判斷ヲ求ムルニアレハ敢テ主張如何ニ拘ハラス仲裁手續ハ

續行スヘク從テ判斷ハ爲スコトヲ得ヘキモノトス尤トモ仲裁人ニ於テ之カ判斷ヲ爲スコトヲ謝絶スルコトハ禁止セス

第七百九十八條 數名ノ仲裁人カ仲裁判斷ヲ爲スコキトキハ過半数ヲ以テ其判斷ヲ爲スコシ但仲裁契約ニ別段ノ定アルトキハ此限ニ在ラ

本條ハ仲裁人數人アルトキノ決定方法ヲ定ム

數名ノ仲裁人アルトキハ其判斷ヲ爲スハ過半数ニ依ル、而シテ可否同數ナルトキハ判斷スルコトヲ得サルヲ以テ當事者ニ其事ヲ通知スヘシ、尤トモ過半数ヲ以テ決セス他ノ方法ヲ採ルコトヲ仲裁契約ヲ以テ定メタルトキハ格別ナリトス、又否可同數トナルトキノ場合ニ於テモ亦同一トス

第七百九十九條 仲裁判斷ニハ其作りタル年月日ヲ記載シテ仲裁人之ニ署名捺印ス可シ

仲裁人ノ署名捺印シタル判斷ノ正本ハ之ヲ當事者ニ送達シ其原告ハ送達ノ證書ヲ添ヘテ管轄裁判所ノ書記課ニ之ヲ預ケ置ク可シ

本條ハ仲裁判斷ノ作成方法ヲ規定ス

第一項 仲裁判斷ハ恰モ裁判所ノ判決ナリ、確實ナラシメサルヘカラス、故ニ判斷ハ其作りタル年月日ヲ記載シ仲裁人之ニ署名捺印スヘキモノトス

第二項 仲裁判斷ノ原本ハ管轄裁判所ノ書記課ニ預クヘシ、之レ私人ノ手許ニアルトキハ紛

失ノ恐レアルヘク又數人ノトキハ其預ケ人ニ付争アレハナリ故ニ書記課ニ預クルヲ以テ安然トス、而シテ當事者コハ其正本ヲ送達スヘシ、其送達書ハ原本ニ添ヘテ後日ノ証トシ書記課ニ預ケ置クナリ

第八百條 仲裁判斷ハ當事者間ニ於テ確定シタル裁判所ノ判決ト同

一ノ效力ヲ有ス

本條ハ仲裁判斷ノ效力ヲ規定ス

仲裁判斷ハ恰モ判決ナリ判決ハ當事者ノ之ヲ守ラサルヘカラサルハ勿論事實確定ノ證據タリ

之ト同シク判斷モ亦確定判決ト同一ノ效力ヲ有シ當事者間ニ在テハ之ヲ遵奉セサルヘカラス

第八百一條 仲裁判斷ノ取消ハ左ノ場合ニ於テ之ヲ申立ツルコトヲ得

第一 仲裁手續ヲ許ス可カラザリシトキ

第二 仲裁判斷カ法律上禁止ノ行爲ヲ爲ス可キ旨ヲ當事者ニ言渡

シタルトキ

第三 當事者カ仲裁手續ニ於テ法律ノ規定ニ從ヒ代理セラレザリ

シトキ

第四 仲裁手續ニ於テ當事者ヲ審訊セザリシトキ

第五 仲裁手續ニ理由ヲ付セザリシトキ

第六 第四百六十九條第一號乃至第五號ノ場合ニ於テ原狀回復ノ

訴ヲ許ス條件ノ存スルトキ

仲裁判斷ノ取消ハ當事者カ別段ノ合意ヲ爲シタルトキハ本條第四號及ヒ第五號ニ掲ケタル理由ニ因リ之ヲ爲スコトヲ得ス

本條ハ仲裁判斷ノ取消申立ヲ爲スヘキ場合ヲ規定ス

第一項 仲裁判斷ハ確定シタル判決ト同一ノ效力ヲ有スルモノナレトモ如何ナルモノト雖モ

判斷セハ直チニ確定力ヲ有スルモノト云フヘカラス、判決ニ於テモ上訴ノ途アリ況ンヤ仲裁

判斷ニ於テチヤ必ラス之カ救済ノ方法ヲ施サ、ルヘカラス之レ上訴ト對峙セル取消申立ヲ爲

サシムル所以ナリ

仲裁判斷ノ取消申立ノ事項ハ本項列記ノ六個トス、何レモ適當ニ爲サレタル判斷ニアラサレ

ハナリ、而シテ其申立ツル裁判所ハ第八百五條ニアリ

第二項 仲裁判斷ハ當事者間ニ效力ヲ有シ已ニ合意ヲ以テ完結スルモノナレハ第七百九十四

條ノ如キ又ハ判斷セシ理由ヲ付セザリシコトノ如キハ當事者ニ於テ合意セハ敢テ他ヨリ抗擧

セサルハ勿論利害ニ及ホスヘキコトナク又判斷上ニ影響ナキモノナリ、故ニ此場合ニ在テ已

ニ合意セル以上ハ此点ヲ以テ取消ノ理由ト爲スコトヲ許サ、ルモノトス

第八百條二條 仲裁判斷ニ因リ爲ス強制執行ハ執行判決ヲ以テ其許ス

可キコトヲ言渡シタルトキニ限り之ヲ爲スコトヲ得

右執行判決中仲裁判斷ノ取消ヲ申立ツルコトヲ得ヘキ理由ノ存スル

トキハ之ヲ爲スコトヲ得ス

本條ハ仲裁判斷ノ強制執行ヲ規定ス

第一項 仲裁判斷ハ其レ自身ハ強制執行力ナキモノナリ、必ラス之ニ強制執行力ヲ付セサルヘカラス、其方法ハ裁判所ニ向ツテ執行判決ヲ求ムルニアリトス、恰モ外國裁判所ノ判決カ我邦ニ於テハ直チニ強制執行ノ力ナクシテ執行判決ヲ受ケサルヘカラサルモノト同一ノ權衡タリ

第二項 右ノ執行判決ハ仲裁判斷取消ノ理由アルトキハ之ヲ與フルコトヲ許サス、蓋シ之ヲ與フルモ後日取消ト爲ルトキハ却テ一方ニ損害ヲ及ホスノ恐レアリ執行判決ハ必ラス仲裁判斷カ確定シタルモノニ對シテ爲スヘキモノナレハナリ

第八百三條

執行判決ヲ爲シタル後ハ仲裁判斷ノ取消ハ第八百一條第

六號ニ掲ケタル理由ニ因リテノミ之ヲ申立ツルコトヲ得但當事者カ自己ノ過失ニ非スシテ手續前ニ於テ取消ノ理由ヲ主張スル能ハサリシコトヲ疏明シタルトキニ限ル

本條ハ執行判決後ノ取消方法ヲ定ム

一度執行判決ヲ下シタル上ハ決シテ取消スコトヲ禁スルモノニアラス、彼ノ判決ニ於テモ確定シタル後ニ於テ再審ノ訴ヲ許スカ如シ、仲裁判斷モ亦同一ニシテ已ニ執行判決ヲ受ケタル後ト雖モ之カ取消ヲ申立ツルコトヲ得ヘキモノトス、然レトモ何レノ場合ニ於テモ然リト云フヘカラス、判決ト同シク原狀回復ノ訴ヲ以テ爲スヘキ場合ノミニ限レリ之レニ者權衡ヲ保

ツ所以ナリ、加之其申立人ニ於テハ今マテ取消ノ申立ヲ爲サ、レハ自己ノ過失ニ非ラスシテ遷延シタルコトヲ疏明セサルヘカラス、然ラサレハ徒ラニ主張ヲ得ヘキ時期アルニモ拘ハラ

第八百四條

仲裁判斷取消ノ訴ハ前條ノ場合ニ於テハ一ヶ月ノ不變期間内ニ之ヲ起ス可シ

右期間ハ當事者カ取消ノ理由ヲ知りタル日ヲ以テ始マル然レトモ執行判決ノ確定前ニハ始マラサルモノトス但執行判決ノ確定ト爲リタル日ヨリ起算シテ五ヶ年ノ滿了後ハ此訴ヲ起スコトヲ許サス
仲裁判斷ヲ取消ストキハ執行判決ノ取消ヲモ亦言渡ス可シ

本條ハ判斷取消ノ訴ノ期間ヲ定ム

第一項 仲裁判斷ノ取消ノ申立ハ之カ時期ナシ、已ニ仲裁判斷ハ確定判決ト同一ノ効力アルヲ以テ仲裁判斷ヲ受ケタル勝者ハ第八百二條ニ從ヒテ直チニ又ハ適宜ニ執行判決ヲ求ムルモノナリ、又之ニ反對セル敗者ニ在テハ其時期ヲ問ハス第八百一條ノ事項ニ當ルトキハ何時ニテモ取消ノ申立ヲ爲スコトヲ得ヘキモノトス

然ルニ前條即チ執行判決ヲ爲シタル後ノ判斷取消ノ申立ハ一ヶ月ノ不變期間内ニ起サ、ルヘカラス、蓋シ之カ期間ヲ定ムルハ已ニ執行判決ヲ受ケ強制執行ヲ爲スモノニシテ或ハ又已ニ執行済ミト爲リシモノモアルヘキナリ然ルニ時期ヲ定メスシテ何時ニテモ之カ取消ヲ求ムル

モノトセンカ勝者ハ安心スヘキ時期ナク何時モ不限定ノ地位ニノミアルニ至ルヘシ故ニ之カ一ヶ月ト定ムルモノトス

第二項 右ノ一ヶ月ハ當事者カ取消ノ理由アルコトヲ知リタル日ヲ以テ始マルヘシ然レトモ執行判決カ確定セサレハ之ヲ起算セス、又假令執行判決後ト雖モ其判決ノ決定シタル日ヨリケ年ノ滿了後ハ絶對的ニ訴ヲ起スヲ許サ、ルモノナリ、之レ際限ナキニ至ルヘシ

第三項 仲裁判斷ヲ取消ストキハ執行判決ヲモ亦取消スヘシ、蓋シ其本ヲ取消セハ其末ヲ取消サ、ル理由ナケレハナリ

第八百五條 仲裁人ヲ選定シ若クハ忌避スルコト、仲裁契約ノ消滅ス

ルコト仲裁手續ヲ許ス可カラサルコト仲裁判斷ヲ取消スコト又ハ執行判決ヲ爲スコトヲ目的トスル訴ニ付テハ仲裁契約ニ指定シタル區裁判所又ハ地方裁判所之ヲ管轄シ其指定ナキトキハ請求ヲ裁判上主張スル場合ニ於テ管轄ヲ有ス可キ區裁判所又ハ地方裁判所之ヲ管轄ス

前項ニ依リ管轄ヲ有スル裁判所數箇アルトキハ當事者又ハ仲裁人カ

最初ニ關係セシメタル裁判所之ヲ管轄ス

本條ハ裁判籍ヲ定ム

第一項 仲裁契約ニ於テ仲裁契約ヨリ生シタル總テノ裁判ヲ受クル場合ニ於ケル管轄裁判所ハ之ヲ指定シ置クヲ以テ通例トス、例ヘハ此仲裁事件ニ付テノ裁判管轄ハ何區裁判所又ハ何地方裁判所ナリトスルカ如シ故ニ夫々其指定セラレタル裁判所ヲ以テ總テノ行爲ヲ申立ツルコトアリ若シモ其裁判所ヲ指定セサルトキハ請求ヲ裁判上主張スル場合ニ於テ管轄ヲ有スル區裁判所又ハ地方裁判所ナリトス、故ニ假令ハ仲裁契約ノ事件カ一萬圓ナルトキハ裁判沙汰トナルトキハ地方裁判所ノ管轄ナリ又價額百圓以下ノ仲裁契約ナルトキハ之レ區裁判所ノ管轄ナルカ如シ、而シテ何レノ裁判所ニ對シテモ訴フヘキ事柄ハ左ノ如シ

第一 仲裁人ヲ選定スルコト

第二 仲裁人ヲ忌避スルコト

第三 仲裁契約ノ消滅スルコト

第四 仲裁手續ヲ許スヘカラサルコト

第五 仲裁判斷ヲ取消スコト

第六 執行判決ヲ爲スコトヲ目的トスル訴ヲ爲スコト

等ナリトス

第二項 前項ニ依リ管轄ヲ有スル裁判所カ數個アルトキハ當事者又ハ仲裁人カ最初ニ關係セシメタル裁判所之ヲ管轄ス、例ヘハ原本ヲ預ケタル裁判所ノ如キ又ハ證人及ヒ鑑定人ノ訊問ヲ求メ又ハ臨檢ノ求メヲ爲シタル裁判所ナルカ如シ

民事訴訟法講義終

○第八編仲裁手續

民事訴訟法施行條例 (明治二十三年七月法律第五十號)

第一條 民事訴訟法實施前ニ提起シタル訴訟ニ付テノ爾後ノ訴訟手續ハ民事訴訟法ニ依リテ之ヲ完結ス

本條ハ民事訴訟法實施前ノ訴訟處分ヲ規定ス
訴訟手續ノ其改正ヲ爲スハ裁判所ノ構成權限ニ伴ヒテ之ヲ爲スヘク又當事者ノ利益ノ爲メニ之ヲ爲スモノナリ、故ニ之カ改正ヲ爲シタル以上ハ前ノ手續ハ消滅スルヲ以テ新ナル手續ニ從ハサルヘカラス、蓋シ法律ハ既性ニ遡ラサルノ格言ヲ以テ本條ノ不當ヲ唱フルモノアラズモ之レ不利益ナル上ニ於テ此原則ヲ適用スルハ兎モ角モ新法ニ從フコト却テ利益ナルノミナラス、訴訟手續ノ如キハ已得權ヲ有スルモノト云フヘカラス、故ニ本條ノ如ク新法ニ依リテ完結スヘキモノトス

第二條 民事訴訟法實施前ニ闕席ノ儘言渡シタル裁判ニ關シテハ民事訴訟法ニ依リ故障ヲ申立ツルコトヲ得

故障ノ期間ハ新法ニ依リ其實施ノ日ヨリ起算ス但其期間カ舊法ノ控訴上告期限ヲ超過スルトキハ其期限ニ從フ

本條ハ欠席判決ノ處分方法ヲ規定ス

第一項 舊法時代ニ於テハ民事裁判ノ欠席言渡ニ對スル手續ヲ規定シタルモノナラズ、故ニ

新法ニ於テ規定スル手續ノ利益ヲ與ヘ新法ニ依リテ故障ヲ申立ツルコトヲ許ス

第二項 第一項ノ故障ノ期間タル十四日ハ民事訴訟法實施ノ日ヨリ起算スルヲ正當トス、其期間カ舊法ノ控訴上告期限ヲ超過スルトキハ必ラス其期限ニ從ハシム之レ本來カ舊法ノ時代ナレハ其時代ニ於ケル相當ノ利益ハ之ヲ換ユルコトヲ許サハルモノトス

第三條 民事訴訟法實施前ニ言渡シタル裁判ニ對スル控訴上告期限ハ新法ノ控訴上告期間ニ依リ其實施ノ日ヨリ起算ス但其期間カ舊法ノ控訴上告期限ヲ超過スルトキハ其期限ニ從フ

本條ハ控訴上告ヲ爲ス期間ヲ定ム

舊法時代ニ言渡シタル裁判ニ對スル控訴及ヒ上告期限ハ新法ノ控訴及ヒ上告ノ期間ニ依リテ民事訴訟法實施ノ日ヨリ起算ス但シ其期間カ舊法ノ控訴上告ノ期間ヲ超ユルトキハ舊法ニ依ラシム

第四條 民事訴訟法實施前ニ確定シタル裁判ニ對シテハ民事訴訟法ニ依リ再審ヲ求ムル訴ヲ爲スコトヲ得但民事訴訟法實施前ニ再審ノ條件生シタルトキハ其條件ノ生シタル日ヨリ再審ノ期間ヲ起算ス

本條ハ再審ヲ許スコトヲ規定ス

舊法ニ於テハ再審ヲ許スヘキ法令ナシ只理論上之ヲ爲スコトヲ得ヘキノミ、民事訴訟法實施ニ在テハ之ヲ許スカ故ニ舊法時代ノ裁判ニ於テモ亦之ヲ許シ利益ヲ與フ、再審ノ訴ヲ爲ス期

間ハ新法ニ依ルヘシト雖モ已ニ實施前ニ於テ再審ノ訴ヲ爲スヘキ條件ノ生シタルトキハ其條件ノ生シタル日ヨリ再審ノ期間ヲ起算スヘキモノトス

第五條 民事訴訟法實施前ニ言渡シタル裁判ノ強制執行ハ民事訴訟法

ニ依リテ之ヲ完結ス但シ既ニ身代限ノ揭示ヲ爲シ又ハ公賣ニ着手シタル事件ハ其手續ノ終了マテハ舊法ニ從フ

本條ハ強制執行ノ場合ヲ規定ス

民事訴訟法實施前ニ言渡シタル裁判ハ民事訴訟法ノ強制執行ヲ以テ完結スルモノトス、尤トモ既ニ身代限ノ揭示ヲナシ又ハ財産公賣中ノモノニ其ノ手續ノ終了マテハ舊法ニ依ル蓋シ中途ニシテ新法ニ引直スコト出來ヌ好シ爲シ得ヘキモノトスルモ煩雜ナルヲ以テナリ

第六條 民事訴訟法實施前ニ言渡シタル裁判ノ執行命令ヲ得サル場合

ニ於テ民事訴訟法第四百九十九條ノ規定ニ從ヒ證明書ヲ要スル者ハ其訴訟記録ノ存在スル裁判所ニ之ヲ求ムルコトヲ得

本條ハ執行命令ヲ得サルモノノ規定ヲ爲ス

民事訴訟法實施前ニ於テハ裁判言渡ハ執行命令ヲ得テ執行ヲ爲スモノナリ、然ルニ未ダ右ノ執行命令ヲ得サル裁判ハ新法ニ於テハ其方法異ナルヲ以テ民事訴訟法ニ依リ確定ノ證明書ヲ得サルヘカラサルモノナレトモ其證明書ハ何レヲ得ヘキヤ否ヤ未定ナリ、此場合ニ於テハ

其訴訟記録ノ存在スル裁判所ニ之ヲ求ムルコトヲ得ヘキモノトス

第七條 民事訴訟法實施前既ニ勸解ヲ出願シ未タ完結ニ至ラサル事件

ハ民事訴訟法第二百八十一條ノ規定ニ從ヒ區裁判所繼續シテ之ヲ完

結スルコトヲ得

本條ハ和解完結ヲ規定ス

舊法ノ時代ニ於テハ勸解ヲ爲スモノナリ而シテ未タ完結ニ至ラサルモノハ之ヲ和解出願セシモノト同視シ民事訴訟法第二百八十一條ノ規定ニ從ヒ區裁判所ニ引繼キ之ヲ完結スルモノトス

第八條 民事訴訟法ノ規定ニ依リ市町村長ノ爲ス可キ職務ハ市町村長

ヲ置カサル地ニ在テハ其職務ヲ行フ吏員ニ屬ス

本條ハ市町村長ノ職務ヲ規定ス

市町村長ノ爲スヘキ職務ハ北海道ノ如キ市町村長ヲ置カサル地ニ於テハ戸長ニ於テ之ヲ爲スヘシ之レ當然トス

第九條 民事訴訟法ニ於テ親族ト稱スル者ハ當分ノ内刑法ノ親屬例ニ

依ル

本條ハ親族ヲ規定ス

○民事訴訟施行條例

民事訴訟法ニ於テ親族ト稱スルモノハ未タ民法ノ規定ナキカ爲メ一時刑法ノ親屬例ニ依ルコトヲ示シタリシカ今日ニ於テハ民法ノ實施セシ以上ハ本條モ共ニ消滅スヘキモノトス

第十條 婚姻離婚及養子ノ縁組離縁ニ關スル訴ニ付テハ特別ノ慣例アルモノハ當分ノ内其慣例ニ從フ

本條ハ婚姻離婚養子ノ縁組離縁ノ事件ニ付テノ規定トス

婚姻離婚養子ノ縁組離縁ニ關スル事件ニ付テハ別ニ當時規定ナキヲ以テ慣例ニ從ハシメタリシカ今日ハ民事訴訟事件手續法アルヲ以テ本條ハ消滅セリ

第十一條 明治八年第六號布告ハ當分ノ内其效力ヲ有スルモノトス

本條ハ明治八年第六號布告ノ効力ヲ規定ス

明治八年第六號布告ハ民事裁判上負債者失跡後ノ訴訟ニ付テノ規定ナレトモ當時ハ有效トナシ其手續ヲ爲シ居リシモ今日ハ民法上ノ規定アリ他ニ民事訴訟法特別代理人ヲ設クルノ規定アルヲ以テ自然消滅ス

第十二條 明治十年第十九號布告控訴上告手續第十六條中大審院トアルヲ上告裁判所ト改メ該條ハ當分ノ内其效力ヲ有スルモノトス

本條ハ上告事訴ニ付豫納金ノコトヲ規定ス

明治十年第十九號布告控訴上告手續第十六條ノ大審院トアルヲ上告裁判所ト改メ當分ノ内效力ヲ有スルモノト爲シタリ

第十六條 上告者ハ其上告狀ニ添テ金拾圓ヲ上告裁判所ニ預クヘシ若シ其金高ヲ預ケサルト

キハ上告ヲ爲スヲ得ス

第一 若シ上告ヲ取上サルトキハ其預リ金ヲ没入ス

第二 若シ上告ヲ取上ケ原裁判ヲ破毀シタル時ハ預リ金ヲ還付ス

第三 若シ上告ヲ取上ケ被告人ト對審シタルノ後之ヲ斥ケテ原裁判ヲ破毀セサル時ハ預リ金ヲ没入シ又訴訟費用規則ニ照シテ被告人ノ費用ヲ償ハシム

上告趣意書ヲ提出スル日ニ於テ豫納金ヲ添付セサルトキハ上告ヲ爲スノ權ヲ失ヒタルモノトス(明治二十五年十月大審院判決)

民事訴訟費用法 (明治二十三年八月法律第六十四號)

第一條 民事訴訟法ノ規定ニ於ケル訴訟費用ハ以下數條ノ規定ニ從ヒ之ヲ算定ス

第二條 訴訟其他總テ書類ノ書記料ハ半枚十二行二十字詰ニ付キ金二錢五厘トス但半枚ニ滿タサルモノモ亦同シ

圖面ハ一葉ニ付金拾錢トス但別ニ測量ヲ要シタルトキハ其測量費ハ裁判所ノ意見ヲ以テ定ムル所ニ依ル

○民事訴訟費用法

第三條 翻譯料ハ半枚十二行二十字詰ニ付キ金五十錢トス但半枚ニ滿
タサルモノモ亦同シ

第四條 民事訴訟用印紙法ニ從ヒ貼用シタル印紙ノ費額ハ代價ニ依ル

第五條 執達吏ノ手数料及ヒ立替金ハ執達吏手数料規定ニ從フ

第六條 郵便料、電信料及ヒ運送料ハ其實費ニ依ル

第七條 官報、公報及ヒ新聞紙ヲ以テ公告シタル公告料ハ各其定價ニ
依ル

第八條 民事訴訟法第二百二十七條ノ規定ニ從ヒ辯護士ノ附添ヲ命シタ
ルトキハ其報酬ハ裁判所ノ意見ヲ以テ定ムル所ニ依ル

第九條 當事者ノ日當ハ出頭一度ニ付キ金五十錢トス但滞在費ヲ給ス
ル場合ニ於テハ此日當ヲ二十五錢トス

第十條 證人ノ日當ハ出頭一度ニ付キ金五十錢トス但滞在費ヲ給スル
場合ニ於テハ此日當ヲ給セス

第十一條 鑑定人及ヒ通事ノ日當ハ出頭一度ニ付金五十錢乃至五圓ノ
範圍内ニ於テ裁判所ノ意見ヲ以テ定ムル所ニ依ル

鑑定又ハ通辯ニ付キ數多ノ時間又ハ特別ノ技能若クハ費用ヲ要スル

トキハ日當ノ外別ニ相當ノ金額ヲ給スルコトヲ得(明治三十三年一月
法律第三號改正)

第十二條 當事者ノ滞在費ハ滿八里以外ノ地ヨリ來リ滞在スルトキハ
一日金二十五錢トシ證人、鑑定人及ヒ通事ノ滞在費ハ一日金五十錢
トス

第十三條 當事者、證人、鑑定人及通事ノ旅費ハ海陸滿一里毎ニ付キ
金十錢トス

通路兩線以上アルトハ最近ノ適路ヲ以テ旅費ヲ算定ス

外國ニ在ル當事者ノ旅費ハ裁判所ノ意見ヲ以テ定ムル所ニ依ル

第十四條 判事及ヒ裁判所書記檢證ノ爲メ實地臨檢ヲ爲スニ付テノ旅
費及ヒ滞在費ハ證人ニ準ス

第十五條 本法ニ定メサル必要ノ費用ハ其實費ニ依ル

第十六條 強制執行及ヒ非訟事件ニ關ル費用ハ執達吏手数料規則ニ定
メタルモノヲ除ク外前數條ノ規定ヲ準用シテ之ヲ算定ス

強制執行又ハ非訟事件ニ關シテ保管人若クハ管理人ヲ任命シタルト

キハ其費用ハ裁判所ノ意見ヲ以テ定ムル所ニ依ル

民事訴訟用印紙法 (明治二十三年八月法律第六十五號)

第一條 民事訴訟ノ書類ニハ以下數條ノ規定ニ從ヒ其正本ニ印紙ヲ貼用ス可シ但裁判所書記ニ口述シテ調書ヲ作ラシメタルトキハ其調書ニ印紙ヲ貼用ス可シ

第二條 財産權上ノ請求ニ係ル第一審ノ訴狀ニハ訴訟物ノ價額ニ應ジ左ノ區別ニ從ヒ印紙ヲ貼用ス可シ

訴訟物ノ價額金五圓マテ	二十錢
同 十圓マテ	三十錢
同 二十圓マテ	六十錢
同 五十圓マテ	一圓五十錢
同 七十五圓マテ	二圓二十錢
同 百圓マテ	三圓
同 二百五十圓マテ	六圓五十錢

同 五百圓マテ	十圓
同 七百五十圓マテ	十三圓
同 千圓マテ	十五圓
同 二千五百圓マテ	二十圓
同 五千圓マテ	二十五圓
同 五千圓以上ハ千圓ニ達スル毎ニ二圓ヲ加フ	

訴訟物ノ價額ヲ算定スルニハ民事訴訟法第三條乃至第六條ノ規定ニ從フ

第三條 財産權上ノ請求ニ非サル訴訟ニ付テハ其訴訟物ノ價額百圓ト看做シ印紙ヲ貼用ス可シ
財産權上ノ請求ニ非サル訴訟ト其訴訟ニ由テ生スル財産權上ノ訴訟ト併合スルトキハ其多額ナル一方ノ訴訟物ノ價額ニ依リ印紙ヲ貼用ス可シ

離縁送籍ハ一個ノ請求ナルヲ以テ其訴狀ニハ之ニ相當スル印紙ヲ貼用スヘシ (明治二十八年法曹會決議)

○民事訴訟用印紙法

第四條 本訴ト反訴ト其目的カ同一ノ訴訟物ナルトキハ反訴ノ訴狀ニ印紙ヲ貼用スルヲ要セス

第五條 控訴狀ニハ第二條ノ規定ニ從ヒ其半額上告狀ニハ其全額ノ印紙ヲ加貼ス可シ

當初各別ニ相當印紙ヲ貼用シテ提起シタル二個ノ訴訟ト雖モ第一審裁判所カ審理ノ便宜上之ヲ併合シ共同訴訟法ト同一ノ手續ニ依リ判決シ再ヒ之ヲ分ツノ必要ナキトキハ其扣訴狀ニ於ケル印紙ハ金額ニ相應スル額ヲ貼用スルヲ相當ナリトス(明治二十五年十月大審院判決)

第六條 左ニ掲クル書類ニハ五十錢ノ印紙ヲ貼用ス可シ

第一 抗告

第二 故障

第三 證據調ノ申立

第四 假差押及ヒ假處分ノ申請

第五 判決物送達アランコトヲ求ムル申立

第六 執行力アル正本ヲ求ムル申立但此正本ノ數通ヲ求ムルトキハ其一通毎ニ五十錢ノ割合ヲ以テ印紙ヲ貼用ス可シ

刑事附帶私訴判決正本ニ執行文ノ附記ヲ求ムル申請書ニハ五十錢ノ印紙ヲ貼用セシムルヲ要ス(明治二十八年法曹會決議)

第七條 和解及ヒ督促手續ニ付キ民事訴訟法第三百八十一條第三項及

ヒ第三百九十條ノ規定ニ依リ訴カ區裁判所ニ繫屬スルトキハ第二條

第三條ノ規定ニ從ヒ印紙ヲ貼用ス可シ

第八條 再審ヲ求ムルノ訴狀ニハ其訴ヲ爲ス可キ裁判所ノ審級ニ依リ

相當ノ印紙ヲ貼用ス可シ

第九條 原狀回復ノ申立ニハ其書面ヲ差出ス可キ裁判所ノ審級ニ依リ

相當ノ印紙ヲ貼用ス可シ

第十條 答辨書其他前數條ニ掲ケサル申立及申請ニハ二十錢ノ印紙ヲ貼用ス可シ

當事者ヨリ訴訟記録中ノ或ル書面ト他ノ書類トノ正本謄本等ヲ同時ニ下付方申出テタルトキハ下付スヘキ書類ノ數ニ應シ印紙二十錢ヲ貼用セサルヘカラス(明治二十九年法曹會決議)

第十一條 民事訴訟法第九十七條第一號ノ場合ノ外此法律ニ從ヒ印紙

ヲ貼用セサル民事訴訟ノ書類ハ其效ヲキモノトス但印紙ヲ貼用セス

又ハ貼用スルモ不足アルトキハ裁判所ハ相當印紙ヲ貼用セシメ之ヲ

有效ナラシムルヲ得

印紙貼用不足アル場合ニ之ヲ加貼セシムルハ必ラス各審級ニ限ルコト非ラス（明治二十七年二月大審院判決）

訴訟印紙不足ノ扣訴狀ヲ受ケタルハ不法ヲ免レスト雖モ民事訴訟印紙法第十一條後半ニヨリ其不足ヲ加貼セシメ之ヲ有效ナラシムルコトヲ得（同年五月同上）

原告カ本訴ヲ百圓以上ノモノナリト認メタル以上ハ本條但書ノ規定ニヨリ訴狀ヲ有效ナラシムル爲メ相當印紙ヲ加貼セシメ若シ之ヲ肯セサルニ於テハ第一審裁判ヲ無効ナラシメ且扣訴ヲ棄却スヘキモノトス（明治二十八年一月同上）

訴訟ノ權利拘束中ハ下級審ニ於ケル印紙ノ不足ヲ上級審ニ至リ之ヲ貼用セシメ以テ有效ナラシムルモ不法ニアラス（同年六月同上）

訴訟書類ニ貼用スル訴訟印紙ハ不足ナルトキハ加貼ヲ命シ違ハサルトキハ棄却スヘキモ直チニ棄却スルハ不法ナリ（同年九月同上）

訴訟登記印紙ハ一旦臺紙ニ貼用シテ消印スルモ臺紙ノ用ヲ達セサル間ハ之ヲ用ユルコトヲ得（明治二十六年法曹會決議）

第十二條 印紙ノ種類及ヒ貼用方ハ明治十七年第四號布達ニ依ル

第十三條 印紙ハ管轄廳ノ許可ヲ得タル賣捌所ニ於テ發賣セシム其他ニ於テ賣買スコトヲ許サス

第十四條 官許賣捌所外ニ於テ印紙ヲ販賣シタル者ハ二十圓以上二百圓以下ノ罰金ニ處シ仍ホ現在ノ印紙ヲ沒收ス其情ヲ知テ之ヲ買取シタル者ハ十圓以上百圓以下ノ罰金ニ處シ仍ホ現在ノ印紙ヲ沒收ス

第十五條 前條ノ規定ヲ犯シタル者ニハ刑法ノ減輕、再犯加重及ヒ數罪俱發ノ例ヲ用井ス

第十六條 第六條第十條乃至第十二條ノ規定ハ非訟事件ニ之ヲ準用ス

家資分散法（明治二十三年八月法律第六十九號）

第一條 民事訴訟法ノ強制執行處分ニ因リ義務ヲ辨濟スル資力ナキ債務者ニ對シテハ管轄裁判所ハ職權ニ因リ又ハ申立ニ因リ決定ヲ以テ家資分散者タルノ宣告ヲ爲スコシ

右ノ決定ハ口頭辯論ヲ要セスシテ之ヲ爲スコトヲ得

此決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第二條 前條ノ申立ハ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

第三條 第一條ノ宣告ハ裁判所及市町村ノ揭示場ニ揭示シテ之ヲ公告

ス可シ

第四條 家資分散者ハ其宣告ヲ受ケタル日ヨリ選舉權及被選舉權ヲ失フ

家資分散者ノ復權ニ付テハ商法第千五十五條以下ヲ準用ス

第五條 商法及本法施行以後ニ於テ従前ノ法律中身代限處分ヲ受ケタル者ニ對シ公權ノ喪失ヲ定メタル條項ハ破産又ハ家資分散ノ宣告ヲ受ケタル者ニ對シ效力ヲ有ス

家資分散宣告後ハ其負債ノ辨償ヲ了ヘスト雖モ私權ノ行使ヲ停止スルニ非ラス唯公權ヲ失フノミ(明治二十六年十月大審院判決)

○ 人事訴訟手續法 (明治三十一年六月法律第十三號)

第一章 婚姻事件及ヒ養子縁組事件ニ關スル手續

第一條 婚姻ノ無效若クハ取消、離婚又ハ夫婦ノ同居ヲ目的トスル訴ハ夫カ普通裁判籍ヲ有スル地又ハ其死亡ノ時ニ之ヲ有シタル地ノ地

方裁判所ノ管轄ニ專屬ス但縁組事件ニ附帶シテ婚姻ノ取消又ハ離婚ノ請求ヲ爲ス場合ハ此限ニ在ラス

前項ノ普通裁判籍ハ日本ニ住所ナキトキ又ハ日本ノ住所ノ知レサルトキハ居所ニ依リ居所ナキトキ又ハ居所ノ知レサルトキハ最後ノ住所ニ依リテ定マル

最後ノ住所ナキトキ又ハ其住所ノ知レサルトキハ司法省令ヲ以テ指定シタル地ヲ住所地トス

本條ハ婚姻ノ無效若クハ取消、離婚又ハ夫婦ノ同居ヲ目的トスル訴ノ裁判管轄ヲ規定スルモノトス

而シテ何レモ夫カ普通裁判籍ヲ有スル地方ハ夫カ死亡セシトキハ其時ニ有シタル地ノ地方裁判所ノ專屬管轄トス

最後ノ住所ナキトキ又ハ其住所ノ知レサルトキハ東京市ヲ以テ住所地トスルコトハ明治三十一年七月司法省令第八號ノ規定スル所トス

第二條 夫婦ノ一方カ提起スル婚姻ノ無效又ハ取消ノ訴ニ於テハ其配偶者ヲ以テ相手方トス

第三者カ提起スル前項ノ訴ニ於テハ夫婦ヲ以テ相手方トシ夫婦ノ一

方カ死亡シタル後ハ其生存者ヲ以テ相手方トス
前二項ノ規定ニ依リテ相手方トスヘキ者カ死亡シタル後ハ檢事ヲ以テ相手方トス

檢事カ當事者ト爲リタル後相手方カ死亡シタルトキハ本案ノ訴訟手續受繼ノ爲メ裁判所ハ辯護士ヲ承繼人トシテ選定スルコトヲ要ス
前項ノ場合ニ於テハ裁判所ハ辯護士ニ報酬ヲ與ヘシムルコトヲ得其額ハ裁判所ノ意見ヲ以テ之ヲ定ムヘシ

本條ハ婚姻無効又ハ取消ノ訴ノ相手方ヲ規定ス

夫婦ノ一方ヨリ出訴スルトキハ其相手方ハ配偶者トス、故ニ夫ハ婦ヲ、婦ハ夫ヲ被告トス、第三者ヨリ訴フルトキハ夫婦ヲ被告トシ、一方死亡セハ生存者ヲ被告トス、以上何レモ相手方ノ死亡セシトキハ檢事ヲ以テ相手方トス

第三條 無能力者カ婚姻ノ無効若クハ取消、離婚又ハ同居ニ關スル訴訟行爲ヲ爲スニハ其法定代理人、保佐人又ハ夫ノ同意ヲ得ルコトヲ要セス

無能力者カ前項ノ訴訟行爲ヲ爲サントスルトキハ受訴裁判所ノ裁判長ハ申立ニ因リ辯護士ヲ訴訟代理人ニ選任スルコトヲ要ス

無能力者カ前項ノ申立ヲ爲サ、ルトキト雖モ受訴裁判所ノ裁判長ハ辯護士ヲ訴訟代理人ニ選任スヘキ旨ヲ命シ又ハ職權ヲ以テ其選任ヲ爲スコトヲ得

前條第五項ノ規定ハ受訴裁判所ノ裁判長カ辯護士ヲ訴訟代理人ニ選任シタル場合ニ之ヲ準用ス

本條ハ無能力者ノ訴訟能力ヲ規定ス

無能力者カ婚姻ノ無効若クハ取消、離婚又ハ同居ニ關スル訴ヲ爲スニハ父母、後見人、保佐人、夫ノ同意ヲ要セサルハ人事ニ關スル事柄ナレハナリ、只裁判官ヨリ注意シテ辯護士ヲ選任スルコトヲ命シ又ハ職權ヲ以テ之ニ付ス

第四條 夫婦ノ一方カ禁治産者ナルトキハ其後見人ハ親族會ノ同意ヲ得テ離婚ノ訴ヲ提起スルコトヲ得
禁治産者ノ配偶者カ其後見人ナルトキハ後見監督人ハ親族會ノ同意ヲ得テ前項ノ訴ヲ提起スルコトヲ得

本條ハ禁治産者ノ出訴ヲ規定ス

禁治産者ナルトキハ其後見人カ離婚ノ原告トナル、若シ後見人カ配偶者ナルトキハ後見監督人之カ原告トナル、假令ハ夫禁治産者ニシテ婦カ後見人ナルトキ離婚ノ訴ヲ爲サントスルト

キノ如シ

第五條 婚姻事件ニ付テハ檢事ハ辯論ニ立會ヒテ意見ヲ述フルコトヲ要ス

檢事ハ受命判事又ハ受託判事ノ審問ニ立會ヒテ意見ヲ述フルコトヲ得

事件及ヒ期日ハ檢事ニ之ヲ通知シ檢事カ立會ヒタル場合ニ於テハ其氏名及ヒ申立ヲ調書ニ記載スヘシ

本條ハ檢事ノ立會ヲ規定ス

檢事ハ公ノ秩序ヲ維持シ風俗ヲ紊ルヲ取締ル職務ナレハ之ニ立會ヒ相當ノ意見ヲ述フルモノトス

第六條 檢事ハ當事者ト爲ラサルトキト雖モ婚姻ヲ維持スル爲メ事實及ヒ證據方法ヲ提出スルコトヲ得

本條ハ檢事ノ職務ヲ規定ス

檢事ハ當然ノ職務アリ假令當事者ナラサルモ婚姻維持ノ爲メ事實及ヒ證據方法ヲ提出スル權ヲ有セシムルハ全ク秩序ヲ維持スルニ出テタルモノナリ

第七條 婚姻ノ無効ノ訴、其取消ノ訴、離婚ノ訴及ヒ同居ノ訴ハ之ヲ併

合シ又ハ反訴トシテ之ヲ提起スルコトヲ得

他ノ訴ハ之ヲ前項ノ訴ニ併合シ又ハ其反訴トシテ提起スルコトヲ得
ス但扶養ノ請求、訴ノ原因タル事實ニ因リテ生シタル損害賠償ノ請求及ヒ民法ノ規定ニ依リ婚姻事件ニ附帶シテ爲スコトヲ得ル縁組ノ取消又ハ離縁ノ請求ハ此限ニ在ラス

本條ハ訴訟ノ併合及ヒ反訴ヲ規定ス

同種類ナルトキハ之ヲ併合シ及ヒ反訴ヲ爲スコトヲ得ヘキモ其他ノ訴ト併合シ反訴スルコトハ許サス之レ手續上ニ於テ不都合ナレハナリ、但シ依リテ生スル所ノ損害賠償ノ如キ婚姻事件ニ付帶スル離縁又ハ縁組取消ノ如キハ反訴スルコトヲ得ヘシ彼ノ婚養子ノ婚姻事件ノ如シ

第八條 婚姻事件ニ付テハ第一審又ハ控訴審ニ於ケル辯論ノ終結ニ至ルマテ訴若クハ其事由ヲ變更シ、之ヲ併合シ又ハ反訴ヲ提起スルコトヲ得

本條ハ併合又ハ反訴ノ時期ヲ規定ス

普通ノ訴訟事件ト異ナリ婚姻事件ハ第一審第二審トモ何時ニテモ訴ヲ變更シ其他ニ自由ナラシム

第九條 婚姻ノ無効若クハ取消又ハ離婚ノ訴ニ付キ棄却ノ言渡ヲ受ケ

タル原告ハ訴若クハ其事由ノ變更又ハ併合ニ依リ主張スルコトヲ得
ヘカリシ事實ニ基キテ獨立ノ訴ヲ提起スルコトヲ得ス
被告ハ反訴ノ事由トシテ主張スルコトヲ得ヘカリシ事實ニ基キテ獨
立ノ訴ヲ提起スルコトヲ得ス

本條ハ訴訟ヲ爲スモノ、制限ヲ規定ス
棄却ノ言渡ヲ受ケタル原告ニ對シテ獨立ノ訴ヲ許サ、ルハ爲スコトヲ得ヘカリシ時期ニ之ヲ
爲サ、リシハ自ラ拋棄シタルニアリ、其被告ニ於テ獨立ノ訴ヲ爲サ、ル理由モ亦同一ナリト
ス

第十條 民事訴訟法第百十一條第二項、第三項及ヒ第三百三十五條至
乃第三百四十一條ノ規定ハ婚姻事件ニ之ヲ適用セス同法第二百二十
九條中請求ノ認諾ニ關スル規定亦同シ
裁判上ノ自白ニ關スル法則ハ婚姻事件ニ之ヲ適用ス
民事訴訟法第二百十條ノ規定ハ婚姻事件ノ控訴審ニ之ヲ適用セス

本條ハ民事訴訟法ノ法條ヲ適用スルヤ否ニ付テノ規定ナリ
同法第百十一條第二第三項ヲ適用セサルハ苟モ事人事ニ關スルヲ以テ單ニ默示ヲ以テ事實ヲ
定ムルコトヲ許サ、ルニアリ又第三百三十五條乃至第三百四十一條ヲ適用セサルハ夫婦間ニ

關係スルヲ以テノ故ナリ又認諾、自由ノ如キモ亦適用セス、殊ニ第二百十條ヲ適用セサルハ
可成鄭重ナラシムルニ外ナラス

第十一條 婚姻事件ノ被告カ第一審ニ於ケル最初ノ辯論ノ期日ニ出頭
セサルトキハ更ニ其期日ヲ定ムルコトヲ要ス但被告カ公示送達ニ依
リテ呼出ヲ受ケタル場合ハ此限ニ在ラス
前項ノ場合ヲ除ク外被告カ期日ニ出頭セサルトキト雖モ辯論ヲ命シ
且判決ヲ爲スコトヲ得此場合ニ於テハ民事訴訟法第二百四十八條及
ヒ第四百二十九條ノ規定ヲ適用ス
前二項ノ規定ハ反訴ノ被告ニ之ヲ適用ス

本條ハ欠席判決ヲ爲サ、ルヲ示ス
被告ニ於テ不參スルモ欠席判決ヲ爲サス更ニ期日ヲ定ムルコトヲ必要トス、尤トモ欠席判決
ヲ爲ストキト雖モ被告カ事實ヲ自白シタリト看做スカ如キコトハ之ヲ許サス

第十二條 裁判所ハ婚姻事件ニ付キ當事者ニ自身出頭ヲ命シ當事者又
ハ檢事カ提出シタル事實ニ付キ訊問ヲ爲スコトヲ得
當事者カ出頭スルコト能ハサルトキ又ハ遠隔ノ地ニ在ルトキハ受命
判事又ハ受託判事ヲシテ訊問ヲ爲サシムルコトヲ得

○民事訴訟手續法

出頭セサル當事者ニハ出頭セサル證人ニ關スル民事訴訟法ノ規定ヲ準用ス

本條ハ當事者自身出頭ヲ命スルコトヲ規定ス
事苟モ公ノ秩序及風俗ニ關スルモノナレハ可成眞實ニ依リテ圓滿ニ結了セシムルヲ務ムルニアレハ自身出頭ヲ命スルモノトシ又場合ニ依リテハ受命判事、受托判事ヲ命ス、
若シ故ナク出頭セサルトキハ罰金ヲ命シ拘引ヲ爲スコトヲ得ヘク、飽マテ眞想ヲ得ントスルニアリトス

第十三條 和諧ノ調フヘキ見込アルトキハ裁判所ハ職權ヲ以テ一回ニ限リ一年ヲ超エサル期間離婚ノ訴ニ關スル手續ヲ中止スルコトヲ得
本條ハ中止ヲ命スル場合ヲ規定ス
前條ノ如ク本人ヲ訊問シテ和解ノ見込アルトキハ職權上一年マテノ期間ニ於テ訴訟ヲ中止シ置クニアリ之レ月日ノ中止ハ和解ノ目的ヲ爲スコ於ケル最第一ノ好材料トス

第十四條 裁判所ハ婚姻ヲ維持スル爲メ職權ヲ以テ證據調ヲ爲シ且當事者カ提出セサル事實ヲ斟酌スルコトヲ得但其實事及ヒ證據調ノ結果ニ付キ當事者ヲ訊問スヘシ
本條ハ職權調査ヲ爲ス場合ヲ規定ス
婚姻ヲ維持スル爲メナルトキハ職權ヲ以テ證據ヲ調査シ進メテ申出ナキ事實ヲモ斟酌スルコト

下ヲ得ヘシ之レ普通訴訟ニナキ手續ヲレトモ婚姻ヲ維持スル点ニ於テハ必要アリトス

第十五條 婚姻ノ無效若クハ取消又ハ離婚ヲ言渡シタル判決ハ職權ヲ以テ之ヲ當事者ニ送達スヘシ
本條ハ判決ハ職權ヲ以テ送達スルモノトセリ
普通ノ訴訟上ニ於テハ申立ナキトキハ送達セサルモ風俗上取締上直チニ判決ヲ送達スルニア

第十六條 扶養若クハ同居ノ義務、子ノ監護其他ノ假處分ニ付テハ民事訴訟法第七百五十六條乃至第七百六十三條ノ規定ヲ準用ス
本條ハ假處分ノ場合ヲ規定ス
扶養ノ義務、同居ノ義務子ノ監護等ハ假處分ヲ要スヘシ

第十七條 檢事カ敗訴シタル場合ニ於テハ訴訟費用ハ國庫ノ負擔トス
本條ハ檢事カ敗訴シタルトキノ訴訟費用ヲ規定ス
檢事ハ公ノ代表人ナリ國家ノ爲メニ訴訟人トナル故ニ敗訴セハ國庫ノ負擔タル當然ノコトトス

第十八條 婚姻ノ無效若クハ取消又ハ離婚ノ訴ニ付キ言渡シタル判決ハ第三者ニ對シテモ其效力ヲ有ス

民法第七百六十六條ノ規定ニ違反シタルコトヲ理由トシテ婚姻ノ取消ヲ請求シタル場合ニ於テ其訴ヲ棄却シタル判決ハ當事者ノ前配偶者ニ對シテハ其者カ訴訟ニ參加シタルトキニ限り其效力ヲ有ス

本條ハ判決ノ效力ヲ規定ス
判決ハ普通ノ訴訟ノ場合ニ於テハ當事者間ノミニシテ第三者ニ對シテ其效力ヲ及ホサ、ルモ婚姻ニ付テハ第三者ニ其效力ヲ及ホスモノトス、蓋シ公ノ秩序風俗ニ關スルモノナルヲ以テノ故ナリ

第十九條 檢事カ提起スルコトヲ得ル婚姻事件ノ訴ニ限り後四條ノ規定ヲ提用ス

本條ハ檢事ノ起訴シタルトキノ特例ヲ示ス

第二十條 檢事カ訴ヲ提起スルトキハ夫婦ヲ以テ相手方トス
本條ハ檢事ノ原告タルトキノ規定トス
檢事カ原告ナルトキハ被告タルヘキモノハ夫婦トス、例ヘハ親子夫婦トナリシコトカ發見セラレタルトキハ風俗ヲ維持スルカ爲メ公ノ秩序ヲ害セラルルカ爲メニ檢事ハ夫婦ヲ相手方トシ

婚姻ノ取消ヲ出訴スルカ如シ

第二十一條 訴ノ變更若クハ併合又ハ反訴ノ提起ハ檢事カ提起スルコトヲ得ル

トヲ得ル訴ナルトキニ限り之ヲ爲スコトヲ得

訴ノ事由ノ變更又ハ併合ハ檢事カ提出スルコトヲ得ル事由ナルトキニ限り之ヲ爲スコトヲ得

本條ハ檢事カ爲スヘキ訴ノ變化ヲ規定ス

檢事ニ於テ訴ヲ起スヘキ事件ナルトキハ訴ヲ變更シ併合シ反訴ヲ爲シ又事由ヲ變更シ若クハ併合スルコトヲ得ヘキモノトス

第二十二條 檢事ハ他ノ者カ訴ヲ提起シタル場合ニ於テモ申立ヲ爲シテ訴訟手續ヲ追行シ又ハ上訴ヲ爲スコトヲ得但夫婦ノ一方カ死亡シタル後ハ此限ニ在ラス

本條ハ檢事ノ上訴ヲ爲ス場合ヲ示ス

檢事ハ其職務上ノ性質ニ於テ假令他ノ者カ訴ヲ爲スモノト雖モ訴訟手續ヲ追行シ又ハ上訴スルコトヲ得ヘシ之レ公ノ秩序、風俗ヲ維持スル職務ナレハナリ

第二十三條 檢事カ上訴ヲ爲ストキハ前審ノ當事者ノ全員ヲ以テ相手方トス

當事者ノ一人カ上訴ヲ爲ストキハ前審ノ他ノ當事者及ヒ當事者タリシ檢事ヲ以テ相手方トス

本條ハ前條ト同シク上訴ヲ爲ストキノ場合ヲ規定ス
檢事カ上訴ナストキハ第一審ノ當事者タル全体ノ人々ヲ相手方トシ、又當事者ノ一人カ上訴
ヲ爲ストキハ尙ホ他ノ當事者ノ外ニ檢事モ亦相手方トス之レ前審ニ於テ檢事ノ陳述ニ依リテ
敗訴ヲナシタルコトアレハナリ

第二十四條 養子縁組ノ無効若クハ取消又ハ離縁ヲ目的トスル訴ハ養
親カ普通裁判籍ヲ有スル地又ハ其死亡ノ時ニ之ヲ有シタル地ノ地方
裁判所ノ管轄ニ專屬ス但婚姻事件ニ附帶シテ縁組ノ取消又ハ離縁ノ
請求ヲ爲ス場合ハ此限ニ在ラス

本條ハ養子縁組ノ訴ノ裁判管轄トス
縁組ノ無効、取消、離縁ヲ目的トスル訴ノ裁判管轄ハ養親カ有スル普通裁判籍ヲ以テ專屬管
轄トス、之レ婚姻事件ト權衡ヲ同一ナラシムルモノトス
但シ婚姻事件ニ附帶シテ縁組ノ取消又ハ離縁ノ請求ヲ爲ストキ彼ノ婿養子ノトキノ請求ハ婚
姻事件ノ管轄ニ從フヘシ

第二十五條 養親カ禁治産者ナルトキハ第四條第一項ノ規定ヲ準用ス
養子カ禁治産者ナルトキハ實方ノ直系尊屬又ハ實家ノ戸主ハ離縁ノ
訴ヲ提起スルコトヲ得

本條ハ養親カ禁治産者ナルトキノ場合ヲ規定ス

第四條第一項ニ準シ其後見人ヨリ出訴ス可シ、之レ養親ノ場合トス其養子カ禁治産者ナルト
キハ實方ノモノヲ以テ訴訟ヲ爲ス

第二十六條 第一條第二項、第三項、第二條、第三條及ヒ第五條乃至
第十八條ノ規定ハ養子縁組事件ニ之ヲ準用ス

本條ハ婚姻事件ノ規定ヲ縁組事件ニ準用スルハ其手續同一ナレハナリ

**第二章 親子關係事件、相續人廢除事件及ヒ隱居事件ニ關ス
ル手續**

第二十七條 子ノ否認、認知、其認知ノ無効若クハ取消又ハ民法第八
百二十一條ノ規定ニ依リ父ヲ定ムルコトヲ目的トスル訴ハ子カ普通
裁判籍ヲ有スル地又ハ其死亡ノ時ニ之ヲ有シタル地ノ地方裁判所ノ
管轄ニ專屬ス

本條ハ裁判籍ヲ規定ス

本條列記ノ場合ハ何レモ子ニ關係スルモノナルヲ以テ子カ普通裁判籍ヲ有スル地又ハ死亡セ
シ時ハ其死亡ノ時ノ有セシ地ノ地方裁判所カ專屬タリ

第二十八條 夫カ禁治産者ナルトキハ其後見人ハ親族會ノ同意ヲ得テ

否認ノ訴ヲ提起スルコトヲ得

本條ハ夫カ禁治産者ナルトキノ場合ノ規定トス
夫カ禁治産者ナルトキハ之カ出訴能力ナキヲ以テ其後見人ニ於テ親族會ノ同意ヲ得テ出訴ス
ヘシ

第二十九條 夫カ子ノ出生前又ハ否認ノ訴ヲ提起セシテ民法第八百

二十五條ノ期間内ニ死亡シタルトキハ其子ノ爲メニ相續權ヲ害セラ
ルヘキ者其他夫ノ三親等内ノ血族ニ限り否認ノ訴ヲ提起スルコトヲ
得

前項ノ場合ニ於テハ否認ノ訴ハ夫ノ死亡ノ日ヨリ一年内ニ之ヲ提起
スルコトヲ要ス

夫カ否認ノ訴ヲ提起シタル後死亡シタルトキハ第一項ニ掲ケタル者
ニ於テ訴訟手續ヲ受繼クコトヲ得

本條ハ夫カ死亡セシ時ノ訴手續ヲ規定ス

夫カ訴訟ヲ爲サスシテ死亡セシトキハ其子ノ爲メニ相續權ヲ害セラルルモノ例ヘハ長女アリ
テ長男ノ出産シ其長男カ否認セラルルモノナルトキノ如シ其他ノ夫ノ血族例ヘハ夫ノ父母、
又ハ祖父母、兄弟ノ如シ此等代リテ出訴ス之レ夫ノ爲メニ大ニ血統ヲ紊ルノ恐レアレハナリ、

其他訴訟中途ニテ夫ノ死亡シタルトキモ是等ノ人々カ繼續スルモノトス

第三十條 父ヲ定ムルコトヲ目的トスル訴ハ子、母、母ノ配偶者又ハ

其前配偶者ヨリ之ヲ提起スルコトヲ得

母ノ配偶者及ヒ其前配偶者ハ互ニ其相手方ト爲ル

子又ハ母カ提起スル第一項ノ訴ニ於テハ母ノ配偶者及ヒ其前配偶者
ヲ以テ相手方トシ其一人カ死亡シタル後ハ其生存者ヲ以テ相手方ト
ス

本條ハ父ヲ定ムル訴ヲ規定ス

子、母、母ノ配偶者又ハ其前ノ配偶者ハ父ヲ定ムル訴ヲ爲スコトヲ得ヘキモノトス而シテ其
原告トナルモノニ依リテ各相手方ヲ異ニスルハ當然ナリトス

第三十一條 親權若クハ財産管理權ノ喪失又ハ失權ノ取消ヲ目的トス

ル訴ハ親權ヲ行フ者カ普通裁判籍ヲ有スル地ノ地方裁判所ノ管理ニ
專屬ス

本條ハ親權喪失、及ヒ失權取消ノ訴ノ裁判管轄トス

親權ヲ行フ者カ普通裁判籍ヲ有スル地ノ地方裁判所ノ專屬タリ

第三十二條 失權ノ取消ヲ目的トスル訴ニ付テハ現ニ親權若クハ管理

權ヲ行フ者又ハ後見人ヲ以テ相手方トス

本條ハ失權ノ取消ヲ訴フモノニシテ相手方ハ親權者、管理者又ハ後見人タリ

第三十三條 推定家督相續人若クハ推定遺產相續人ノ廢除又ハ其廢除

ノ取消ヲ目的トスル訴ハ被相續人カ普通裁判籍ヲ有スル地又ハ其死

亡ノ時ニ之ヲ有シタル地ノ地方裁判所ノ管轄ニ專屬ス

本條ハ相續人ノ場合ニ於ケル裁判管轄トス

相續人ニハ二種アリテ一ハ推定家督相續人ニシテ一ハ推定遺產相續人タリ

此等ノ相續權ヲ廢除スヘク又已ニ廢除セラレタルモノヲ取消スヲ目的トスル訴ナリ、此時ハ

其相續人カ普通裁判籍ヲ有スル地又ハ死亡ノ時ニ有シタル地ノ地方裁判所ノ專屬トス

第三十四條 廢除ノ取消ヲ目的トスル訴ニ付テハ廢除ニ因リテ推定家

督相續人又ハ推定遺產相續人ト爲リタル者ヲ以テ相手方トス

本條ハ廢除取消ノ訴ノ相手方ヲ規定ス

廢除ノ取消ハ其廢除セラレタルカ爲メニ推定家督相續人又ハ推定遺產相續人ト爲リタルモノ

ヲ以テ被告トス

廢除ニ因リ相續人アラサルトキハ廢除セラレタルモノヲ相手方トシテ訴フヘシ(明治三十三年九月法曹會決議)

年九月法曹會決議)

第三十五條 隱居ノ無効又ハ取消ヲ目的トスル訴ハ隱居者カ普通裁判

籍ヲ有スル地又ハ其死亡ノ時ニ之ヲ有シタル地ノ地方裁判所ノ管轄

ニ專屬ス

本條ハ隱居ニ關スル訴方法ヲ規定ス

隱居ノ無効又ハ取消ヲ目的トスル訴ハ隱居セシ者カ有セシ普通裁判籍ノ地方裁判所ノ專屬ト

ス

第三十六條 隱居者カ提起スル隱居ノ無効又ハ取消ノ訴ニ於テハ家督

相續人ヲ以テ相手方トス

家督相續人カ提起スル前項ノ訴ニ於テハ隱居者ヲ以テ相手方トス隱

居者及ヒ家督相續人ニ非サル者カ提起スル第一項ノ訴ニ於テハ隱居

者及ヒ家督相續人ヲ以テ相手方トシ其一人カ死亡シタル後ハ其生存

者ヲ以テ相手方トス

本條ハ相手方ヲ定ム

隱居者カ原告ナルトキハ家督相續人ヲ被告トス

家督相續人カ原告ナルトキハ被告ハ隱居者トス

第三者カ原告ナルトキハ隱居者及ヒ家督相續人ヲ共同被告トシ其内一人死亡セシトキハ殘リ

○人事訴訟手續法

ノ一人ヲ以テ被告トス

第三十七條 検事ハ本章ニ掲ケタル訴ニ付キ事實及ヒ證據方法ヲ提出スルコトヲ得

裁判所ハ職權ヲ以テ證據調ヲ爲シ且當事者カ提出セサル事實ヲ斟酌スルコトヲ得但其實事及ヒ證據調ノ結果ニ付キ當事者ヲ訊問スヘシ本條ハ檢事ノ職務ヲ規定ス

檢事ハ公益ノ爲メニ自ラ事實及ヒ證據方法ヲ提出スルコトヲ得ヘク裁判所モ亦職權ヲ以テ證據調ヲナシ且提出セサル事實ヲ斟酌シテ裁判スルコトヲ得ヘシ

第三十八條 本章ニ掲ケタル訴ニ付キ原告ノ申立ニ相當スル言渡ヲ爲シタル判決ハ職權ヲ以テ之ヲ當事者ニ送達スヘシ

本條ハ判決送達ヲ規定ス

第三十九條 第一條第二項、第三項、第三條、第五條、第七條第二項、第十條乃至第十二條及ヒ第十六條乃至第十八條ノ規定ハ本章ニ掲ケタル訴ニ之ヲ準用ス

第七條第一項、第八條及ヒ第九條ノ規定ハ第三十一條、第三十三條及ヒ第三十五條ニ掲ケタル訴、子ノ認知ノ無効ノ訴及ヒ其取消ノ訴

ニ之ヲ準用ス

第二十一條乃至第二十三條ノ規定ハ親權又ハ財産管理權ノ喪失ヲ目的トスル訴及ヒ隠居ノ取消ノ訴ニ之ヲ準用ス

第二條第三項乃至第五項ノ規定ハ第三十條第二項、第三項、第三十四條及ヒ第三十六條ノ場合ニ之ヲ準用ス

本條ハ他ノ事件ノ法條ヲ準用スルコトヲ規定ス

何レモ其性質ニ於テハ異ナルコトアルモ訴訟手續上敢テ異ナルコトナキモノナレハ之ヲ準用スルヲ以テ省略法トス

第三章 禁治産及ヒ準禁治産ニ關スル手續

第四十條 禁治産ノ申立ハ禁治産ノ宣告ヲ受クヘキ者カ普通裁判籍ヲ有スル地ノ區裁判所ノ管轄ニ專屬ス

第一條第二項ノ規定ハ前項ノ裁判籍ニ之ヲ準用ス

本條ハ禁治産ノ申立ヲ爲スヘキ裁判所ヲ定ム

夫レ治産ノ禁ノ申立ヲ爲ス人々ハ民法ニ依リ本人、配偶者、四親等内ノ親族、戸主、後見人、保佐人、檢事ナリトス、此等ノ人々ニ於テ禁治産ノ宣言アラントラ申出ツル裁判所ハ宣言ヲ受クヘキ人ノ普通裁判籍ヲ有スル區裁判所ノ專屬トス

此區裁判所ヲキトキハ第一條第二項ニ依ル

第四十一條 妻カ夫ノ禁治産ノ申立ヲ爲スニハ夫ノ許可ヲ受クルコトヲ要セス

本條ハ妻カ禁治産ノ申立人タルトキノ規定トス
妻カ出訴スルニハ夫ノ許可ヲ得サルヘカラサルモ此際ハ夫ノ許可ヲ得ルコトヲ得サルモノナレハ本條ニ於テ許可ヲ要セサル旨ヲ規定ス

第四十二條 申立ハ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

申立ニハ其原因タル事實及ヒ證據方法ヲ表示スヘシ

本條ハ申立方法ニシテ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得、其申立ニハ原因タル事實及ヒ證據方法ヲ表示スヘシ

第四十三條 裁判所ハ禁治産ノ手續ノ開始前診斷書ノ提出ヲ命スルコトヲ得

本條ハ禁治産ノ診斷書ヲ命スルコトヲ得ヘキ場合ニシテ果シテ心神喪失セシヤ否ヤヲ知ル材料トス

第四十四條 禁治産ノ手續ハ之ヲ公行セス

本條ハ之カ公行ヲ禁スルハ家内ノ平和ヲ破リ外觀ニ關スルヲ以テナリ

第四十五條 檢事ハ他ノ者カ禁治産ノ申立ヲ爲シタル場合ニ於テモ申立ヲ爲シテ其手續ヲ追行シ且期日ニ立會ヒテ意見ヲ述フルコトヲ得

事件及ヒ期日ハ檢事ニ之ヲ通知シ檢事カ立會ヒタル場合ニ於テハ其氏名及ヒ申立ヲ調書ニ記載スヘシ

本條ハ檢事ノ職務ヲ規定ス

檢事ハ公益上之カ維持ヲ爲ス職務ナレハ假令他ノ者カ禁治産ノ申立ヲ爲シタルトキト雖モ尙ホ手續ヲ追行ノ爲メニ申立ヲナシ且期日ニ立會ヒテ意見ヲ述フルコトヲ得ヘシ

第四十六條 裁判所ハ申立ニ表示シタル事實及ヒ證據方法ヲ斟酌シ職權ヲ以テ心神ノ狀況ニ關スル探知及ヒ必要ト認ムル證據調ヲ爲スヘシ

民事訴訟法第二編第一章第六節及ヒ第七節ノ規定ハ證人及鑑定人ノ訊問ニ之ヲ準用ス

本條ハ裁判所ノ職權ヲ定ム
裁判所ニ於テハ職權ヲ以テ果シテ禁治産ノ宣言ヲナス原因アリヤ否ヤヲ知ルカ爲メニ探知及ヒ必要ト認ムル證據ノ取調ヲ爲スモノトス

第四十七條 裁判所ハ鑑定人ノ立會ヲ以テ禁治産ノ宣告ヲ受クヘキ者ヲ訊問スヘシ但其訊問ヲ爲シ難キトキ又ハ其者ノ健康ニ害アルトキ

ハ此限ニ在ラス

前項ノ訊問ハ受託判事ヲシテ之ヲ爲サシムルコトヲ得

本條ハ禁治産者ノ訊問ヲ規定ス

裁判所ニ於テハ禁治産者ヲ訊問スルニハ鑑定人ノ立會ヲ以テス鑑定人トハ此場合ニ在テハ醫師ナリ

第四十八條 禁治産ノ宣告ハ心神ノ狀況ニ付キ鑑定人ヲ訊問シタル後

ニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ得ス

本條ハ宣告ヲ爲スヘキ場合ヲ示ス

禁治産ノ宣告ハ必ラス心神ノ狀況ニ付鑑定人ヲ訊問シタル後ニアラサレハ爲スコトヲ許サス、蓋シ鄭重ヲ以テシ且無能力ノ宣告ナレハナリ

第四十九條 禁治産ノ申立ニ關スル手續ノ費用ハ禁治産ノ宣告アリタ

ル場合ニ於テハ禁治産者ノ負擔トス

前項ノ場合ヲ除ク外手續ノ費用ハ申立人ノ負擔トス但檢事カ申立ヲ爲シタル場合ニ於テハ國庫ノ負擔トス

本條ハ禁治産ノ申立ノ費用ヲ規定ス

禁治産ノ申立ニ關スル總テノ費用ハ禁治産ノ宣告アリシトキニ限り禁治産者ノ負擔トス、之

ニ反シテ禁治産ノ宣告ヲ爲スヘカラサルトキハ之レ申立人ノ負擔タリ

第五十條 裁判所ハ禁治産ノ宣告ヲ爲スニ至ルマテ其宣告ヲ受クヘキ

者ノ監護又ハ其財産ノ保存ニ付キ必要ナル處分ヲ命スルコトヲ得禁

治産ノ宣告ヲ爲シタル後其處分ヲ必要ト認ムルトキ亦同シ

本條ハ必要處分ヲ規定ス

裁判所ニ於テハ禁治産者タルヘキモノニ對シテ監護又ハ其財産ノ保存上必要ナル處分ヲ爲スヘキモノトス、其宣告後ニ必要ナルトキモ亦同一ナリ

第五十一條 禁治産ノ申立ヲ却下シタル決定ハ職權ヲ以テ之ヲ申立人

及ヒ檢事ニ送達スヘシ

禁治産ヲ宣告シタル決定ハ職權ヲ以テ申立人檢事及ヒ禁治産者ノ法

定代理人又ハ法律ニ依リ後見人ト爲スヘキ者ニ之ヲ送達スヘシ

第五十二條 禁治産ヲ宣告シタル決定ハ禁治産者ノ法定代理人又ハ法

律ニ依リ後見人ト爲ルヘキ者カ其送達ヲ受ケタル日ヨリ效力ヲ生ス

法定代理人又ハ法律ニ依リ後見人ト爲ルヘキ者ナキ場合ニ於テハ檢

事カ送達ヲ受ケタル日ヨリ效力ヲ生ス

本條ハ禁治産ノ決定ノ効力ヲ規定ス
禁治産ノ宣告ノ決定ノ効力ハ其決定書ヲ法定代理人又ハ法律ニ依リ後見人トナルヘキ者ニ送達ヲ受ケタル日ヨリ生スルモノナリ

若シ其送達ヲ受クルモノナキトキハ檢事ニ送達シ之ヲ受ケタル日ヨリ効力ヲ生ス

第五十三條 裁判所ハ禁治産ヲ宣告シタル決定ヲ送達シタルトキハ直ニ之ヲ公告スヘシ

本條ハ公告ヲ爲スヘキ規定トス

禁治産ノ宣告ヲ送達シタルトキハ直チニ之ヲ公告スルハ其人ヲシテ之ヲ知ラシムルニ外ナラス

第五十四條 申立人及ヒ檢事ハ禁治産ノ申立ヲ却下シタル決定ニ對シテ即時抗告ヲナスコトヲ得

第四十三條乃至第四十六條ノ規定ハ抗告裁判所ノ手續ニ之ヲ準用ス
本條ハ却下決定ノ場合ヲ示ス

禁治産ノ申立ヲ却下セララルトキハ即時抗告スルコトヲ得、抗告裁判所ハ其上級ノ裁判所ニシテ恰モ控訴ノ地位ニアルモノナリ

第五十五條 民法ノ規定ニ依リテ禁治産ノ申立ヲ爲スコトヲ得ル者ハ其宣告ニ對シ一个月内ニ訴ヲ以テ不服ヲ申立ツルコトヲ得

前項ノ期間ハ禁治産者ニ對シテハ禁治産ノ宣告ヲ知りタル日ヨリ之ヲ起算シ其他ノ者ニ對シテハ決定カ効力ヲ生シタル日ヨリ之ヲ起算ス

本條ハ宣告ニ對スル不服申立ヲ規定ス

禁治産ノ申立ヲ爲スコトヲ得ヘキ人々ハ禁治産者ノ宣告ニ對シテ訴ヲ以テ不服ノ申立ヲ爲スコトヲ得ヘシ、而シテ一ヶ月内ナリトス

此一ヶ月ハ禁治産者ハ宣告ヲ知りタル日ヨリ起算シ其他ノ者ニ在テハ効力ヲ生シタル日即チ**第五十二條ノ日ヨリ起算ス**

第五十六條 前條第一項ノ訴ハ禁治産ノ宣告ヲ爲シタル區裁判所ノ所在地ヲ管轄スル地方裁判所ノ管轄ニ專屬ス

本條ハ裁判管轄ヲ定ム

禁治産ノ宣告ニ對スル不服ノ訴ハ宣告シタル區裁判所ノ所在地ヲ管轄スル地方裁判所トス
第五十七條 第五十五條第一項ノ訴ニ於テハ禁治産ノ申立人ヲ以テ相手方トス

禁治産ノ申立人カ死亡シタル後ハ檢事ヲ以テ相手方トシ檢事カ提起スル前項ノ訴ニ於テハ禁治産者ノ法定代理人ヲ以テ相手方トス

本條ハ不服ノ訴ノ相手方ヲ示ス

不服ノ訴ヲ爲スニハ禁治産ノ申立人ヲ以テ被告トス、其者カ死亡シタル時ハ檢事ヲ以テ被告トシ、檢事カ不服ノ訴ヲ爲ストキハ禁治産者ノ法定代理人ヲ以テ被告トス

第五十八條

第五十五條第一項ノ訴ニハ他ノ訴ヲ併合シ又ハ之ニ對シテ反訴ヲ提起スルコトヲ得ス

本條ハ併合及ヒ反訴ヲ規定ス

不服ノ訴ニハ他ノ訴ヲ併合シ又ハ之ニ對シテ反訴ヲ許サス之レ特種ノモノトシテ結了ヲ速クナラシムルコアリ

第五十九條

第二條第四項、第五項、第三條、第五條、第十條、第十一條、第十七條、及ヒ第四十八條ノ規定ハ第五十五條第一項ノ訴ニ之ヲ準用ス

本條ハ準用スヘキ法條トス

第六十條

裁判所カ第五十五條第一項ノ訴ヲ理由アリト認ムルトキハ禁治産ヲ宣告シタル決定ヲ取消スヘシ此場合ニ於テハ判決ノ確定ニ至ルマテ禁治産者ノ監護又ハ其財産ノ保存ニ付キ必要ナル處分ヲ命スコトヲ得

本條ハ裁判所ノ判決ヲ爲ス方法ヲ示ス

訴ヲ受ケタル裁判所ニ於テハ訴ノ理由アリトスルトキハ禁治産ノ宣告決定ヲ取消スヘシ、但此判決ノ決定ニ至ル迄ハ禁治産者ノ監護及ヒ財産處分ニ付キ必要ナル命令ヲ下スヘキモノトス

第六十一條

禁治産ノ宣告ノ取消前ニ於テ後見人カ爲シタル行爲ハ其效力ヲ變セス

禁治産ノ宣告ノ取消前ニ於テ禁治産者カ爲シタル行爲ハ禁治産ヲ宣告シタル決定ニ基キテ之ヲ取消スコトヲ得ス

本條ハ決定取消前ノ效力ヲ示ス

禁治産ノ宣告ヲ爲シタル後其決定取消ノ前ノ間ニ於テ爲シタル後見人ノ所爲ハ其效力ハ變セス依然トシテ有效ナルモノトス

禁治産者カ禁治産ノ宣告決定取消前ニ於テ自ラ爲シタル行爲ハ禁治産ノ宣告ノ決定アリテ理由ヲ以テ其行爲ヲ取消スコトヲ得ス蓋シ自ラ爲シタル行爲ナルノミナラス未確定ノモノナルヲ以テ爲メニ他人ヲ害スルノ恐れアレハナリ

第六十二條

禁治産ノ宣告ヲ取消シタル判決ハ職權ヲ以テ之ヲ當事者ニ送達スヘシ

前項ノ判決カ確定シタルトキハ第一審ノ受訴裁判所ハ之ヲ公告スヘシ

本條ハ取消判決ノ送達ヲ規定ス

職權ヲ以テ當事者ニ送達スヘク又判決カ確定スルトキハ第一審ノ受訴裁判所ハ之ヲ公告シ第五十三條ト照應シテ本人ニ知ラシムルコアリ

第六十三條 禁治産ノ原因止ミタルコトヲ理由トシテ其宣告ノ取消ヲ求ムル申立ハ禁治産者カ普通裁判籍ヲ有スル地ノ區裁判所ノ管轄ニ專屬ス

第一條第二項及ヒ第四十二條乃至第四十八條ノ規定ハ前項ノ場合ニ之ヲ準用ス

本條ハ宣告取消ノ管轄裁判所ヲ定ム

禁治産ノ原因ノ止ミタルトキハ之ヲ理由トシテ宣告ノ取消ヲ求ムルコトハ民法ノ規定スル處ヲリ即チ心神喪失ノ状況カ止ミタルトキニアリ

第六十四條 前條第一項ノ申立ニ關スル手續ノ費用ハ禁治産ノ宣告ノ取消アリタル場合ニ於テハ禁治産者ノ負擔トス
前項ノ場合ヲ除ク外手續ノ費用ハ申立人ノ負擔トス但檢事カ申立ヲ

爲シタル場合ニ於テハ國庫ノ負擔トス

本條ハ申立ノ費用ヲ規定ス

申立ノ費用ハ禁治産ノ宣告ノ取消アリタル場合ニ限り禁治産者ノ負擔トス、之ニ反スル他ノ場合ハ申立人ノ負擔タリ

第六十五條 禁治産ノ取消ノ申立ヲ却下シタル決定ハ職權ヲ以テ之ヲ申立人ニ送達スヘシ

禁治産ヲ取消シタル決定ハ職權ヲ以テ之ヲ申立人、檢事及ヒ禁治産者ニ送達スヘシ第六十二條第二項ノ規定ハ此決定ニ之ヲ準用ス
檢事ハ前項ノ決定ニ對シテ即時抗告ヲ爲スコトヲ得此抗告ハ執行停止ノ效力ヲ有ス

本條ハ申立却下ノ方法ヲ規定ス

取消ノ申立ヲ却下スル決定ハ職權ヲ以テ送達ス、其取消ノ決定ハ申立人檢事及ヒ禁治産者ニ送達ス

第六十六條 禁治産ノ取消ヲ申立ツルコトヲ得ル者ハ其申立ヲ却下シタル決定ニ對シ訴ヲ以テ不服ヲ申立ツルコトヲ得

第五十六條乃至第六十條第六十一條第一項及ヒ第六十二條ノ規定ハ

前項ノ訴ニ之ヲ準用ス

本條ハ禁治産ノ取消ヲ申立ル者ノ不服申立ヲ規定ス
禁治産ノ取消ヲ申立ツルコトヲ得ル者ハ其申立ヲ却下シタル決定ニ對シ訴ヲ以テ不服ヲ申立ツ
ルコトヲ得ヘキモノトス

第六十七條 準禁治産ニ關スル手續ニハ本章ノ規定ヲ準用ス

第四十三條、第四十七條及ヒ第四十八條ノ規定ハ浪費者ニ之ヲ適用
セズ

第三條第二項乃至第四項ノ規定ハ準禁治産者ニ之ヲ適用セズ

本法ハ準禁治産ニ關スルコトハ禁治産ニ關スル場合ニ同シ

第六十八條 準禁治産ノ取消ヲ申立ツルコトヲ得ル者ハ民法第十二條

第二項ノ規定ニ依リテ爲シタル宣告ノ取消又ハ變更ヲ申立ツルコト
ヲ得此場合ニ於テハ準禁治産ノ取消ニ關スル規定ヲ準用ス

本條ハ準禁治産ノ取消ヲ申立ツルコトヲ得ル者ハ民法第十二條第二項ノ保佐人ノ同意アルコ
トヲ要スル旨ノ宣告ヲモ取消又ハ變更スルコトヲ申立ツルコトヲ得ヘシ

第六十九條 本章ノ規定ニ依リテ爲スヘキ公告ノ方法ハ司法大臣之ヲ
定ム

本條ハ公告方法ハ司法大臣之ヲ定ムルモノニシテ官報及ヒ新聞紙ナリトス（明治三十一年七
月司法省令第九號）

第四章 失踪ニ關スル手續

第七十條 失踪ノ宣告及ヒ其宣告ノ取消ニハ以下數條ニ定メタルモノ

外民事訴訟法第七百六十五條乃至第七百七十五條ノ規定ヲ準用ス

本條ハ失踪ニ關スル規定トス

失踪ノ宣告及ヒ其宣告ヲ取消スニハ本章外ハ公示催告手續ニ依ルヘキモノトス

第七十一條 失踪ノ宣告又ハ其取消ノ申請ハ不在者ノ所在地ノ區裁判

所ノ管轄ニ專屬ス

第一條第二項及ヒ第三項ノ規定ハ前項ノ場合ニ之ヲ準用ス

本條ハ失踪宣告及ヒ取消ノ申立ノ裁判所ハ不在者ノ住所地ノ區裁判所ノ管轄ニ專屬ス

第七十二條 公示催告ニハ左ノ事項ヲ記載スヘシ

- 一 不在者ハ公示催告期日マテニ其生存ノ届出ヲ爲スヘク其届出
ヲ爲サルトキハ失踪ノ宣告ヲ受クヘキコト
- 二 不在者ノ生死ヲ知ル者ハ公示催告期日マテニ其届出ヲ爲スヘ
キコト

公示催告期間ハ六ヶ月以上ナルコトヲ要ス

本條ハ公示催告ニ記載スヘキ事項ヲ列記シタリ

第七十三條

不在者ノ出生後百年以上ヲ經過シタル場合ニ於テハ公示催告ノ公告ハ裁判所ノ掲示板ニ掲示スルヲ以テ足ル

前項ノ場合ニ於テハ公示催告期間ハ其公告ノ日ヨリ二ヶ月以上ナルヲ以テ足ル

本條ハ公示催告ノ公告方法ヲ定ム

公示催告ハ掲示板ノ外官報又ハ公報、新聞紙等ニ爲スヘキモノナレトモ已ニ百年以上ヲ經過スルモノニ付テハ只二ヶ月以上裁判所ノ掲示板ノミヲ以テ公告セハ十分トス

第七十四條

檢事ハ失踪ノ宣告又ハ其取消ノ申立ニ付キ意見ヲ述ヘ且審問ヲ爲ス場合ニ於テハ之ニ立會フコトヲ得

第四十二條第二項、第四十五條第二項及ヒ第四十六條ノ規定ハ本章ノ手續ニ之ヲ準用ス

本條ハ檢事ニ於テモ失踪ニ付キ意見ヲ述ヘ且審問ニ立會スヘキモノトス失踪ハ公益ニ大關係ヲ及ボシ國家ノ經濟ニモ及ボスモノナレハ國家ノ代表者ニ於テ之ニ干渉スルコト外ナラス

第七十五條

各利害關係人ハ共同ノ申立人トシテ手續ニ加ハリ又ハ申

立人ニ代ハリテ手續ヲ續行スルコトヲ得

本條ハ利害關係人ノ干渉ヲ規定ス

不在者ニ對スル各利害關係人假令ハ債權者ノ如キ相續權ヲ有スル者ノ如キハ本件ノ手續ニ加ハリ又ハ申立人ニ依リテ手續ヲ續行スル權ヲ有セシム

第七十六條

不在者カ其生存ノ届出ヲ爲シタル場合ニ於テ申立人カ其事實ヲ認メサルトキハ判決ノ確定ニ至ルマテ公示催告手續ヲ中止ス

ヘシ

本條ハ公示催告ヲ中止スル手續ヲ定ム

不在者カ其生存ノ届出ヲ爲シタルトキニ於テ其事實ヲ認メサルトキハ公示催告ノ手續ヲ中止スルモノトス

第七十七條

失踪ノ宣告ニ關スル手續ノ費用ハ失踪ノ宣告アリタル場合ニ於テハ相續財産ノ負擔トシ其他ノ場合ニ於テハ申立人ノ負擔トス

本條ハ失踪ノ手續費用ヲ規定ス

失踪ニ關スル費用ハ其宣告アリシトキハ相續財産ノ規定シ其他ノ場合ハ申立人ノ負擔トス

第七十八條

失踪ノ宣告ノ判決ニ對シテ不服ヲ申立ツル訴ハ利害關係

人ヨリ之ヲ提起スルコトヲ得

前項ノ訴ニ付テハ失踪ノ宣告ノ申立人カ死亡シタル後ハ檢事ヲ以テ相手方トス此場合ニ於テハ第二條第四項及ヒ第五項ノ規定ヲ準用ス本條ハ失踪ノ宣告ニ對スル不服申立ノ手續ヲ規定ス失踪ノ宣告ニ對スル不服申立ハ利害關係人ヨリ起訴ス、死亡シタルトキハ檢事ヲ以テ相手方トス

第七十九條

數個ノ不服申立ノ訴アルトキハ裁判所ハ之ヲ併合スヘシ此場合ニ於テハ民事訴訟法第五十條ノ規定ヲ適用ス

本條ハ數個ノ不服申立ノ訴アルトキハ裁判所之ヲ併合ス

第八十條

民法第三十二條ニ依ル失踪ノ宣告ノ取消ハ其判決ニ對スル不服申立ノ訴ヲ以テ之ヲ請求スルコトヲ得但失踪者ノ生存スルコトヲ理由トスル場合ニ於テハ民事訴訟法第七百七十五條ノ規定ヲ適用ス

用ス

本條ハ失踪ノ宣告ノ取消方ヲ規定ス取消ハ訴ヲ以テ請求スヘシ

附則

第八十一條 本法ハ民法施行ノ日ヨリ之ヲ施行ス

第八十二條 明治二十三年法律第百四號其他從前ノ法令ニシテ本法ノ規定ニ牴觸シ又ハ重複スルモノハ本法施行ノ日ヨリ之ヲ廢止ス

第八十三條 本法施行前ニ提起シタル訴ニシテ其判決確定セサルモノニハ本法ノ規定ヲ適用ス

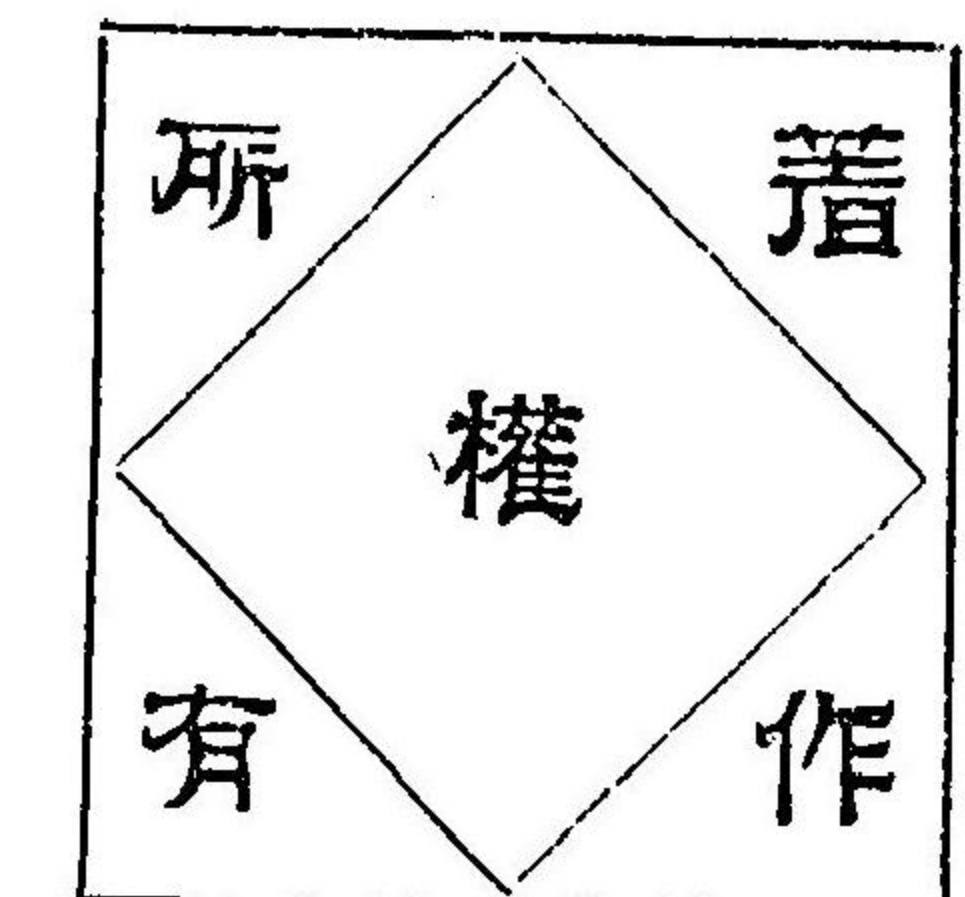
明治三十四年七月廿五日印刷
明治三十四年七月三十日發行

八月一日

講述者 樋山 廣業

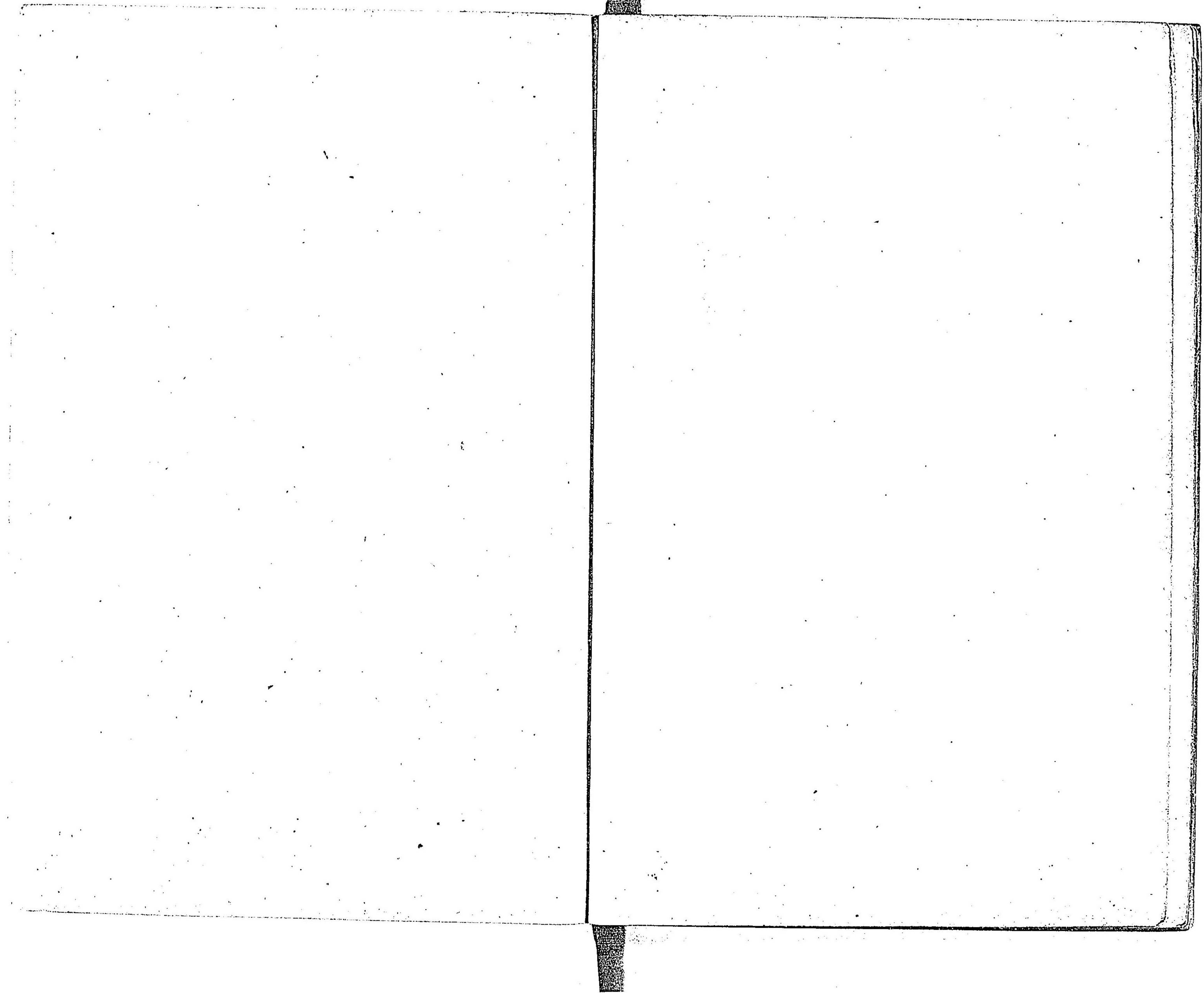
民事訴訟法講義與附

發行者 大塚 宇三郎
大阪市南區安堂寺橋通四丁目二百三十三番屋敷

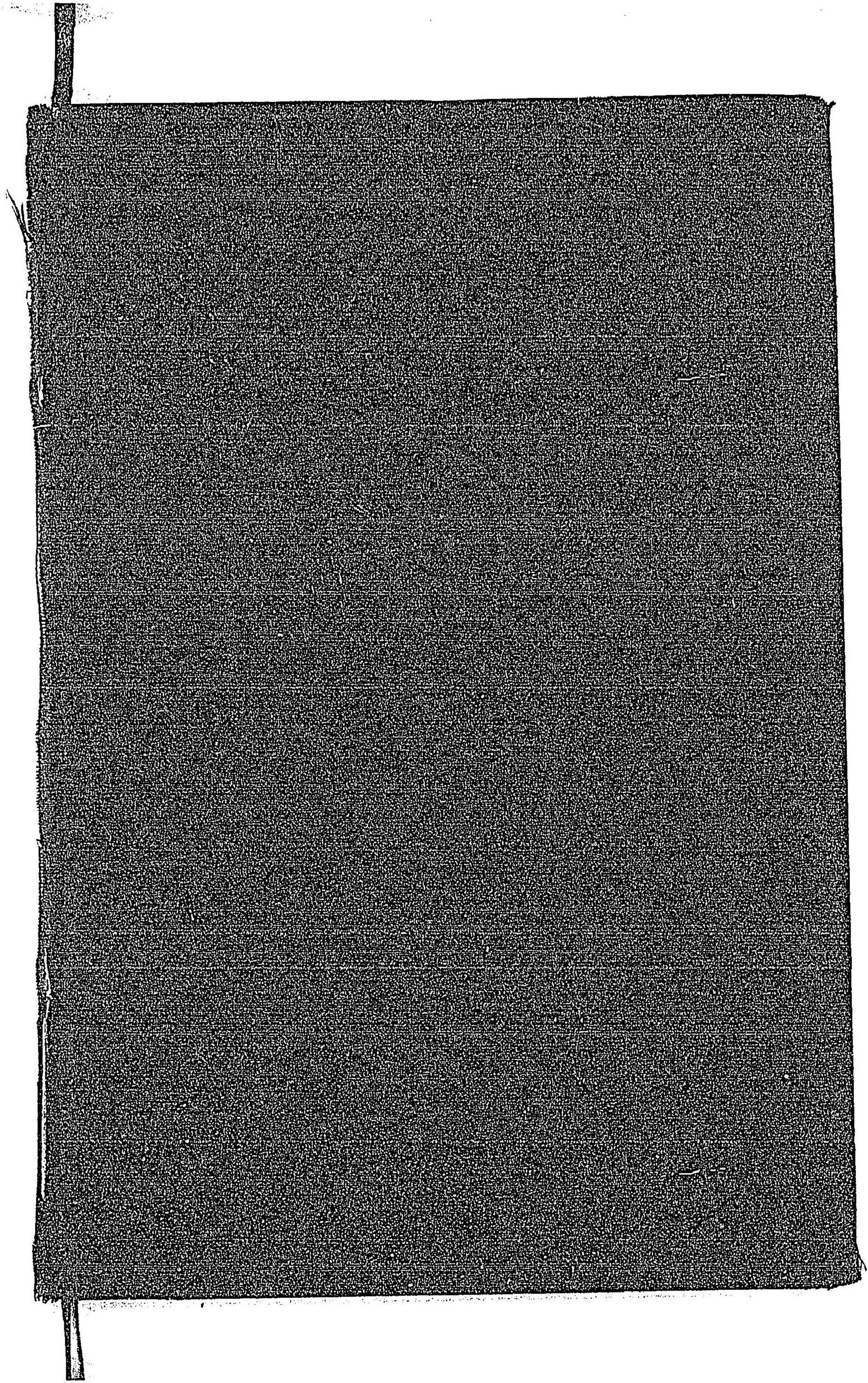


發行所 田中 太右衛門
大阪市南區安堂寺橋通四丁目二百四十二番屋敷
(電話東一七七四番)

印刷者 前田 菊松



88
185



88
185

036613-000-3

88-185

改正民事訴訟法講義

樋山 広業/述

M34

BBS-0031

